

才覚溢れる凡夫

神無明夜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

歌い手なオリ主がプロセカの色々なキャラたちと絡むお話。

※ 宮益坂女子学園側にはあんまり絡めなさそうな予感がするけど見切り発車な
で許してヒヤシンス

R-15と残酷な描写は保険

目 次

始まりの始まり。つまり始まり	—	1	98
秋の日の脚は早そうで微妙にゆっくり	7		
『人の口に戸は立てられぬ』がもうちょつ と頑張つて欲しかつた	—	19	
アップルパイは美味しい……いいね？	31		
最近行つてなかつた行きつけの店	42		
友達の誘い方（初級編）で予習はした	60		
混ぜるな飲めん	78		

R a g n a r o k o f s t u d e n t s (期末試験最終日)	—	111	98
「気が付いたらお互い呼び捨て」位が丁度 いい	—		
やつぱりどこか似てるもの	—		
156 124			

始まりの始まり。つまり始まり

きっかけは『なんとなく』だつた。

たまたま父親が音楽関係の人間で家に機材と防音室があつたので適当に歌つて投稿してみた。

当時は中学3年の2月中旬位だつたと思う、受験も終わり開放感からか我ながらはつちやけたものだ。

予想外だつたことが3つ、1つは動画が思つていたより伸びた。

ぶつちやけ1回きりのお遊びみたいな感じでほぼアカペラ載つけたみたいな投稿だつたが「シンプルに声がいい」とか「こここの抑揚好きやねんけどわかるやつおる?」とか「技術の低さが見えるけど今後に期待できる」などなど。気付けば俺は今後の成長に期待系歌い手として君臨してしまつたらしい。

2つ目は1週間もしない内に親にバレた、そして怒られた。そらまあ勝手に機材使つたら普通怒るよな、ほんとあの頃の俺つてバカ。

そして3つ目が親公認になつた。なんでも「音楽関係者としてはその才能を腐らせて

2 始まりの始まり。つまり始まり

おくのは看過できん」との事でなんなら機材も借りられるしなんなら発声とか楽器の演奏の指導もして貰えることになった。

そんなこんなで歌い手『Soma』として活動を続けることとなつたのが1年以上前の話だ。

「神山高校2—A教室」

教室に入ると橙色の明るい髪のイケメンがいた。恐らくは学園一のハイテンションでシスコン、天馬司てんまつかさが丁度椅子から立ち上がるうとしていたところだった。

「おはよ司」

「ん？ おお真尋まひろではないか、おはよう！ 今日も良い朝だな！」

「おう、それより今日は少し機嫌がいいんじやないか？ なんかいつもより動きにキレがあるぞ」

「フツフツフツ、実は今朝の朝食はなんと！ 我が最愛の妹である咲希さきのスクランブルエッグだつたのだ！！」

「へへ、咲希ちゃん料理もできただんだな」

「料理ができる、というよりも『身体も良くなってきたから色々なことに挑戦してみたい』と日夜様々なものに関心を寄せてているのだ！ さすがは我が妹、兄として誇りに思うぞ！！」

「ほんと1回も会つたことないのに色々なこと知つてるって変な感じだな……というかそこまで自慢されると普通に本人と話してみたくなるんだが」

「む、そういうえば真尋は咲希と話したことがなかつたな。もし会うことがあればその時はよろしく頼むぞ！ではオレは少し類るいに用があるので失礼するぞ、フハハハハハハツ！」

上機嫌な高笑いを響かせながら司は教室から出ていった、それを横目に荷物を片付け読書に移る。正直俺は友達と呼べる存在があまり多くないので司が居ない時はいつも1人で本を読んでいることが多い。

今日も例に漏れず本の世界に旅だつ——「入りあい入相先輩はいますか？」：たせてはくれないみたいだ。

名指しで呼ばれたのに無視するつもりもないので入口まで向かう。

そこにはゆるく卷いたピンクの髪をサイドテールに纏めた可愛らしい子がドアからひょっこり顔を覗かせていて。『近くでみるとこりやまた可愛らしいな』なんてしようものないことを考えながら声をかける。

「俺が入相だが、君は？」

「あ、初めまして入相先輩。1——Aの暁山瑞希です♪」

あきやまみずき

「暁山……ああ、不登校で補講によく顔を出していると先生たちの間で噂になつてあるの」

「うわあ、凄い覚えられ方してんなボク」

「それで？何か用があるから呼んだんだろ」

「そうそう、けどここじや話しづらい内容なんで屋上行きません？」

「それは困る」

「?なんですか??」

「それはお前の後ろに鬼の形相の先生が立つているからだ」

「ふえ？」

と言つた途端ガタイのいい先生（おそらく1年の担当だろう、面識が無い）はまるで猫でも持ち上げるように暁山の首根っこを掴み教室から出ていった。

「ぬわあー!!はーなーせー!!こんなおーぼーなこと許されないぞ!!」

「安心しろ暁山、親御さんからは『多少無理矢理にでも補講だけは受けさせてください』と許可を頂いてる。今日は珍しく一限からいるんだ、勿論六限まで付きつきりで受講してやるからな」

「にやあーーーー!!!!先輩ヘルプ！可愛い後輩の危機だよ!!」

「……暁山、勉強は大事だぞ。放課後屋上で待つてゐるな」
「裏切り者お……」

暁山の声が一階に消えていったのを聞きながら席に着き読書を再開しようと思つた
が……HRまで残り3分、新しい章に入ったばかりなので今から読み出してもだいぶん
半端なところで切り上げることになるのでボーッと外でも眺めることにした。今日は
なんだか賑やかだな、などとどうでもいいことを考えながら先生が来るのを待つてい
た。

秋の日の脚は早そうで微妙にゆつくり

（神山高校屋上）

少し錆び付いたドアを押し開け外に出る。

10月も後半に差し掛かつた今日この頃、日の脚が早くなってきたとは言え時刻は午後4時前、太陽もだいぶん傾いてはいるが夕焼けにはまだ早そうだ。

『アニメとか漫画で放課後の屋上つて大抵夕焼けだけどそんなに遅くまで残つてるとつて部活してないとまあな』

なんて考えながら入口の横に腰かけて読書を始める。ここ最近は新撰組に関する歴史物ばかり読んでいるが某アニメや某漫画の登場人物と名前が混じつて仕方ない、面白いから全巻持つてるし映画も行つたんだけどさ。

そういえば暁山はどこで俺の名前を知つたんだ？

数少ない友人としては司か類、もしくは類の友達で1年の草薙さん、司の友達（信者？）の冬弥位のものだ。

司や類が暁山と知り合いだという話は聞いたことがないが……まあ自分の交友関係を逐一報告し合うほどの関係という訳でもないし、

「え、お前あいつとも友達だつたの？」なんてことは司に関してはよくある事だ。

類は……よくわからんな、今にして思えばなんで俺は類に気に入られたんだろうか？
考えれば考えるほどわからんことが多いな。悪いやつじゃない、というかめつちや良い奴だしどつちでもいいけどな。

草薙さんと冬弥もよくわからん、学年が違うから会う機会も少ないしなんなら類か司
がいないと音楽の話しかしないからそれ以外のことはよく知らん。

「んー、わからん」

「何が分からぬの〜？」

1人のをいいことに呟いた言葉に横から返事が聞こえてきた。

「……いつから居た」

「えつと、2分くらい前かな？」

と言われたので腕時計を確認すると時刻は4時5分と6分の間くらいだった、そこまで時間は経つていなかつたようだ。

「声掛けてくれても良かつたんだぞ？」

「なんか集中してるみたいだつたし、邪魔しちや悪いって思つたんだけど、いきなり喋りだしたから声掛けちゃった」

「ちよつと考え方をしててな。暁山はどこで俺の名前を知つたのか考えていたんだ」

「あゝなるほど、名前自体はだいぶ前から知つてたんだよ？先輩2年の中じや有名人だしね」

なんと、それは初耳だ。360度どこから見ても凡人な自分が噂されることなんかあるのか？

「ちなみにどう有名なんだ？」

『変人男子三大巨頭』ですかね。まあ、ボクが本格的に知つたのは司先輩に動画見せてもらつた時かな？

あと、『暁山』じゃなくて『瑞希』って呼んで、そつちの方がカワイイし

『変人男子三大巨頭』……もしかしなくとも残りの2人は司と類か？』

「そうそう、前に校庭で何かを爆発させてたことあつたでしょ？その時たまたま補講受けてたんだけど、先生が『ああ、またアイツらか……』つて溜息付きながら注意しに行つたんだよね、それで帰ってきてから話聞いたら『2年にヤバい男子が3人いてな、そい

「つらにはいつも振り回されっぱなしだ』って言つてたよ』

『爆発』

と聞いて思い出すのは類が悪そうな高笑いをあげながら走り去つて行つたあの悲しき事件のことだろうか？あの時は司が人ばし……ゲフンゲフン、身を呈して俺と類を逃がしてくれたという感極まるエピソードがあるので。今は置いておこう

「むう、しかし納得できないな。司や類は兎も角として俺はあいつらほど奇天烈な行動はとつてはないぞ？なんなら先生方とは同学年の生徒よりも良好な関係を築けていると自負している」

「それはそれで悲しいけどね、んくでも確かに、話してみると先輩つてそこまで変人つて訳でもないね。多分奇天烈な人達と一緒にいるからそう見えるんじゃない？」

それはありそうだ、だが今更そんな噂の一つや二つ流れたところで関係をどうこうしようとは思わん。なんならその噂にすら気づいてなかつたわけだしな。

「つて、ボクはこんな話がしたいんじゃないよ！今日は先輩に聞きたいことがあるんだ

よ

「そう言えば用事があるって言つてたな、すっかり忘れていた」

思つたより会話が弾んで当初の目的を忘れていた。

と言つても呼び出されて話しずらい内容と言われると……あれか?

「先輩、『S o m a』って知つてるよね?」

口元を小さく歪ませながら疑問と言うよりかは確認するよう聞いてきた
なかつた。

「ありや? 随分あつさり認めちやうんだね?」

「正直覺悟はしてたしな、司とか類辺りにはいつバレてもおかしくない…というか類は
案外もう気づいてたりするかもしけんが。ともかく言いふらしたりするようなやつ
じやなかつたらバレていつかなつて思つてた」

「まあ、ボクも初めは司先輩が見せてくれた動画に先輩の声が入つてそれを聞いた友

達?」が「この人『Soma』?」って言い出してさ。それでよくよく聞いてみたら確かに似てるって言うか生配信の時と声がまんま同じだつたからほぼ100%かな?って思つてたんだ」

なるほど、というか友達凄いな。そんなびっくり人間なら是非一度会つてみたいものだ。

『どうか生配信見ててくれたのか、ご視聴ありがとうございます。』と心でお礼を言つておく

「それで?」

「ん?」

「いや「ん?」じゃなくて、俺が『Soma』だつたとしたら瑞希はどうするんだ?」

「別にどうもしないよ?ただ個人的に気になつてたからさ。

あ、あとは確認の意味もあつたかな?」

「確認?そりやまたなんで?」

「んく、秘密かな。大丈夫、言いふらしたりはしないからさ!そこは安心してよ」

「……まあならないが。ところで瑞希、俺だけ答えるというのもなんだか釈然としない

からこちらからもひとつ質問させてくれ」

正直ず――――――と気になつてた。なんなら朝の時点で思つてたけどそれこそ人前では言い難いことだつたから言わなかつた。

「いいよーなんでも聞いて聞いて聞いて」

「なんでそんな格好してるんだ?」

話はだいぶ変わるが精神科医の母曰く、「徐々に慣れてくれる人は沢山いる、けど初めから理解してくれている人はほとんど居ないからね」
なんだそうだ、せつかく波長が合いそうな後輩ができたんだ、理解するならとことん理解したい。

「……へえ、先輩はそういうこと言わないって思つてたけど。どうやら気のせいだったみたいだね」

『空気が死ぬ』というのはこういうのを指すのだろう。さっきまでの笑みは何処へやら、ピクリとも表情を動かさず淡々とそれでいて憤る様に告げてくる。

「そうか、それはすまんな。だが理由を言つてくれなきや解らん」

「ボクがカワイイものが好きなのはわかるでしょ？それが答えだよ。カワイイのが好きだからカワイイ格好をしてるの」

瑞希の目を見る。母から教わったなんちやつてメンタルチェック曰く『目は口が言わぬ物を言う』らしいので目を見れば大まかな心理はわかるらしい。かくいう俺も小学生くらいの頃に母から教えて貰つてから面白半分で色々頑張つて読み取ろうとしてたら高校にはいる頃には大まかにだが読み取れるようになつていた。母様万歳

瑞希に不安や恐怖は無い。それどころか失望と自信に満ち溢れていた。

「不安や恐怖はない……失望は俺に対するものか、自信は自分の考え方か？」

「つ！へえ、そんな特技もあるんだね。やっぱり先輩も『変人男子三大巨頭』だよ」「失敬な、まあそれは置いておくとしてだ。そういう方面での不安やその格好による

人間関係の悩みは……あるに決まってるよなあ、そこまで敏感に反応するつてことは。あ、だから不登校なのか？まあ仕方ないとは言いきれんが理解がない人間が多いつていのものも事実だし……」

「ちよ、ちよっと待つて！なんでいきなりカウンセリング始まってるの？というか人の感情勝手に読まないんで欲しいんだけど」

「いや、わけアリなんだろうなとは思つていたが全く話してくれなさそうだしこつちからストレートにぶつ込んだ方が色々話してくれるかなと思つてな、案外吐き出してみるとスッキリするもんだぞ？診た感じ本当に『やりたい事をやりたいようにやつてている』みたいだからな、だから瑞希も自信に溢れてるんだろう？」

「なにそれ……もういいや、ピリピリしちゃつたボクがバカみたいじやんか。つまり先輩は理解しつつもあえて核心に爆弾投げ込んできたつてことでしょ？」

「まあそりなんだが、そう言わると我ながらかなり無遠慮だつたな、素直にすまん許してくれ」

「あー、もういいつて。ボクのことちゃんと解つてくれてるならそれでいいからさ」

「そうか、それは助かる。ついでに最後の小言だ、これは精神科医の息子としてお節介という形で言わせてもらうが……」

「なに？ボクはボクであることを辞める気は無いよ？」

「そんなことは言うわけないだろ、そうじやなくて『何か言われないと理解できない人もいる』ってことを覚えて欲しい。人間は他人への関心が案外薄いんだ、心当たりあるだろ？」

「痛いほどあるよ、無関心で無遠慮な言葉ならよく聞いてきたからね。」

「まあ、司とか類の周りにいるヤツらはそういうの全く気にしないタイプだからな。瑞希からしたらああゆうタイプ付き合いやすいだろうし、それに友達つてお前の口から言えるやつもいるんだろう？なら大丈夫だとは思うが一応考え方のひとつとして覚えておいてくれ。誰しもが『言われなくても解る』ほど他人に興味を持つてる訳ではないってことだ。」

「ほんと、カウンセリングの先生と話してるみたい。でも覚えとくよ、僕のこと心配して言つてくれてるんでしょ？」

「そらまあ、会つて数時間だが結構波長が合うタイプだと思つてるし。」

「でもこの様子だとほんとに余計なお世話だつたかもな、傷つきはするがちゃんと立ち直り方をわかってるみたいだし。ほんとに強い子だ。」

「……やっぱり先輩つて変人だね」

「もしかしなくともバカにしてるか?」

「あはは! どうだろうね? ジヤあ僕帰るから。バイバイ
あ、そうだ。今夜もよろしくね♪」

「? 今夜もつてどういうことだ? ……つてもういないし』

静かになつた屋上は肌寒く、少し寂しいようにも感じたがそんなことより、

『男子変人三大巨頭』なんて呼ばれてたのか……』

司や類は兎も角、自身のことも指す不名誉な通り名に思つた以上に心を傷つけられつ
つ、鞄を持つて瑞希が開けつ放しで出ていつたドアをくぐり、帰路に着いた。

『人の口に戸は立てられぬ』がもうちょっと頑張つて欲しかつた

「入相家真尋の部屋」

時刻は24：30、久々に音楽サークルさんから歌入れの依頼を貰えたので今日はその打ち合わせ、今回はあるの謎が多いとされている『25時、ナイトコードで。』、通称『ニーゴ』さんからだ。なんでも普段はボイスチャットツール『ナイトコード』でのやり取りのみで制作しているらしい。

今回の打ち合わせもそちらで行いたいというわけでナイトコードのダウンロードを30分前に始めた
のだが……

「ツスー…止まっちゃったよ」

途中まで順調だったのに残り3分の1位のところからピクリとも動かなくなつた。空き容量は十分にあるはずだから大丈夫だと思うんだけど、さすがに焦る。せっかく依

頼を頂いたのに「ちょっとダウンロードできなかつたんでもやつぱりなしで☆」はさすがにヤバい。

一応先方に連絡しておくべきだろうか？だがまだ集合時間の30分前、最低でも5分前にボイチャに参加するとして残り25分の余裕はある。

「ニーゴさんの曲でも聞いとくか」

パソコンはそのままでスマホから某有名動画アプリを開く。元々有名な曲はあらかじて聞いておく派なのでチャンネル登録等はしている。曲の印象としては『悔やむと書いてミライ』という曲から何となく前向きな曲が増えたように感じる、あと歌っている人達の団結力も上がつたんじやなかろうか。レコードティングを一緒に録るようにならんだろうか？そこら辺も是非聞いてみたいが、なんかあまり突つ込んだこと聞きすぎるのも気が引けるのでそこら辺の線引きも重要かもな。

そもそも今回はかなり特殊な例だからな。わざわざ俺の意見も曲に取り入れたい、歌う人間が意見をくれた方が聞く人に響く曲になる。なんて言つて打ち合わせをすることになるとは思わなかつた、それだけ本気なんだと伝わるとのに比例してプレッシャーもグングン上がつてしまふ、しかもニーゴさんにとっても恐らく外への依頼は初のはず

だ。大丈夫かな？声震えてない俺??

「お？やつと進んだか」

ちらりとパソコンに目を向けるとさつきの停滞はなんだつたのかという速度でダウンロードが進んでいく。あつという間にアプリを起動できるようになつた。

早速開いてアカウント作成へ、名前は『Soma』、プロフィールとか一言コメントは……めんどいから後でやるとして。事前にツッタカターのDMで送つて貰つていたIDを検索して：名前は『K』さんか、シンプルだな。フレンド申請をしてからメッセージを打ち込む。

『今回依頼を頂きましたSomaです』

『フレンド申請がギリギリになつてしまい申し訳ございません、PCの調子が悪くナイトコードのダウンロードが遅くなつてしましました。重ねてお詫び申し上げます』

パパッと打ち込み送信しておく、ダウンロードくらい前日にしつけや、と言われたら全力で謝る所存だ。

ここで時間を確認、24:42:まだ少し余裕があるが何時でもボイチャに参加できる準備をしておこう。と言つてもAmazonで買った三千円もしないボイチャ用のマイクと音楽を聴く時に使つてるそれなりに高い愛用のイヤフォンだ。音質のいいマイクは防音室にあるが今回は自分の部屋だし打ち合わせだけなのである程度聞こえればいいだろう。

ポピングツ

『Kさんがフレンドに追加されました』

『Kさんから新着メッセージがあります』

お、来たな

『依頼を受けて頂きありがとうございます、”25時、ナイトコード。”の作曲を担当しますKです』

『フレンド申請等は問題ありません、時間通りに準備して頂いてありがとうございます』

『準備が整いましたら25時頃にこちらのグループにご参加ください』

『Kさんから”25時、ナイトコードで。”に誘われました』

「……なんだよめっちゃいい人じやん、絶対ボイチャ入つたらもつかい謝ろ」

そう決意し、グループに参加する。

『25時、ナイトコードで。』に参加しました』

Soma：『はじめまして、今回依頼を頂いたSomaです。』

Soma：『作品完成までの短い間ではありますがよろしくお願ひ致します。』

Amia：『よろしくお願ひします♪』

えななん：『よろしく』

雪：『よろしくお願ひします』

K：『改めてよろしくお願ひします、早速ですがボイチャに入つてもらつても大丈夫ですか？』

『Somaさんがボイスチャットに参加しました』

「あーあー、聞こえてますか？」

「あ、はい。聞こえます、今回は依頼を受けてもらつてありがとうございます」

「うわ、ほんとにさつきの動画と同じ声じやん」

「だから言つたでしょ？ えなんもたまにはボクを信じた方がいいよ」「はじめまして、よろしくお願ひします」

ん、歓迎されてるのかされてないのかわからん雰囲気。

「えつと…S o m aさん」

「あ、呼び捨てで大丈夫ですよ、話し方も楽なようにしてもらえるとこちらも緊張しませんので。えー、Kさんでいいですか？」

「はい…じゃなくて。うん、じゃあわたしも呼び捨てで大丈夫だよ。それでS o m aに先に謝つとかないとダメなことがあるんだけど…A m i a」

「うう…はあーい、S o m aさん。ごめんなさい」

「あ、なるほどな、だから『今夜もよろしくね』だつたのか。
声と話し方で何となく察しは着いてるけど。一応弁明は聞いてやろう」
「あ、あつはは…さすが先輩。実はね？」

（約10分前）

「あ、そう言えばさK。歌い手さんとの打ち合わせって今日の何時からだつけ？」

「25時からの予定」

「どうか歌つてもらうだけなのに打ち合わせとかいるの？」

「Somaさんの声質とか雰囲気をより理解してからの方が曲の完成度が上がると思うし、より上手く表現出来た方が沢山の人聞いて貰えると思うから」「…より多くの人を救えるように？」

「うん、わたしはそのために作り続けてるから」

「Kらしいね、でもまあ先輩なら色んなジャンル歌つてるし案外どんなのでも何とかなりそうだけどね〜」

「先輩？ ちょっとそれどう言うこと？」

「あ、ヤバ」

「AmiaってSomaさんの知り合いなの？」

「いや、Kが教えてくれたんじやんか。『この人Somaじゃないのか』って」

「そう、だっけ？ ゴメン覚えてないかも…」

「ええ！ ほら文化祭の動画見せてあげた時だよ、映つてる人の声がSomaに似てるつて。

「この動画の…ほらこの時の声」

「…………ああ、思い出した」

「私そんな動画のこと聞いてないんだけど?」

「えななんと雪が落ちちゃつたあとだつたしね。作曲の参考になるかもしけないって言うから見せてあげたんだ」

「K、よくわかつたね」

「依頼受けて貰つてすぐだつたからSomaさんの曲を色々聞いてたんだ。多分だからわかつたんだと思う」

「でもそれって似てるつてだけで、まだ本人かどうかは分からんんじゃないの?」
「今日確認したら本人らしいよ」

「確認したつて、あんたまさか直接聞きに行つたの!?!」

「あつはは♪でも、先輩もすぐに話してくれたよ?『いつかバレると思ってた!』って言つてたし」

「でもAmia、それつて教えたわたしはともかく、えななんと雪に教えても良かつたの?」

「さすがに許可ぐらい貰つてるから喋つてるんでしょ?ね、Amia?……ちょっとAmia聞いてる?」

「……ちよつと先輩に連絡、ああ、連絡先知らないや」「許可、もらつてなかつたんだね」

「とりあえずボイチャ繋がつたら謝りなさいよ」

「A m i a、ちゃんと謝つて許してもらつてね? 一応知り合いだとしても依頼先の人なんだから最低限以上の礼儀は尽くして」

「…うん、今回はさすがにちゃんと謝るよ」

「なんてことがあつたんだ」

「いや、話すなよ」

「まあ、そうよね普通、あと雪！サラッとミュートしてんじゃないわよ！」

「ごめんなさい、お話の邪魔になるかなつて思つちゃつて。次からは気をつけるね」

「え、あ…うん。ならいいけど」

「……それで？瑞——A m i aは俺のどこまで教えたんだ？声と同じ学校つてことだけか？」

「うん、名前はさすがにボクも言つてないから安心して」

「安心できる要素がないんだが、つてかまさかお前がニーゴさんのメンバーだつたとは…俺としてはそつちの方が衝撃だ」

「A m i aのことは許してくれるの？」

「はい…じゃなくて。ああ、別にわざと言ひふらした訳でもないんだろう？だつたらいいよ別に。その代わりと言つちやなんだが他のメンバーの皆さんも言いふらしたりするのはさすがにやめてくださいね？あ、それとK、フレンド申請とか色々とギリギリになつて申し訳ない」

「うんうん、それは全然大丈夫。機材トラブルがあつたみたいだし、何より時間には間に合つてるからそれに関してはほんとに気にしないで」

「よし！じゃあ色々謝つて済んだところで、改めて自己紹介しようよ♪」

「その色々の元凶であるあんたが言うか…」

「でも、そうだね。一度きちんと自己紹介しておこう」

「うん、私もその方がいいと思うな」

「…じゃ、ボクから行くね？ではでは。主に動画担当をしてる。A m i a ですよよろしくね先輩。ほら、次えななん」

「え、私!?えっと…コホン、イラスト担当のえななんです。多分A m i aと同じ学校なら私とも同じ学校だと思うからよろしく。……次雪ね？」

「うん、雪です。作詞とミックスが主な担当で…他に何か話した方がいいかな？えっと、歳はA m i aの一個上だよね？多分同い年だからよろしくね。最後にKだね」

「…うん、えつと、改めまして。作曲担当のKです。曲完成までの短い期間ですがよろしくお願ひします。……これでいいのかな？」

「あ、俺もしますね。えー、S o m aです。簡単な編曲程度ならできますがメインは歌うことです。あと歳はA m i aの一つ上です。よろしくお願ひします。…結局敬語になつちまつたな」

「あ、やつぱり私と同い年なんですね。じゃあKとえななんとも同い年ですよ？」

「え、そうなんですか？二ーゴメンバーが全員学生だつたとは、しかもえななんさんとも同じ学校か。世間は狭いな」

「だよね、ボクも初めて知った時は驚いたよ。あと先輩、敬語抜けきつてないよ」

「うつ、そこは仕方ないだろ。慣れるまで流石にある程度時間はいる」「じゃあ自己紹介も終わつたしそろそろ打ち合わせ始めるね?」

「うん、私は大丈夫だよ」

「私もいいけど：そもそも何を打ち合わせるの?」

「うん、まずは全体のテーマを決めるところから――

こうして色々、ほんとに色々あつたが何とか打ち合わせを始めることができた。

アツプルパイは美味しい……いいね？

（神山高校2—A）

すっかり秋となり、何となく夏や春よりも空が高く見える気がする今日この頃。流れるうろこ雲を眺めていたら4限目の授業がいつの間にか終わっていたので昼飯の準備をする。と言つても今日はコンビニで惣菜パンを買つてきたので購買に走る予定は無い。

取り出したるは本日のメイン惣菜パン、『ワインナー＆マヨネーズパン』、名前の通りパンにワインナーとマヨネーズぶっかけただけの単純なパンだ、こいつは数時間カバンに入れっぱなしのぬるいお茶とによく合う。

「いただきます」

冷めきつたマヨネーズの油分が染み込んだパンの香りと思つたより細いワインナーの味を噛み締めながら何となしに教室の扉に目を向ける。

先日思わぬ伏兵（初対面の1年）にバレてしまつたこともあり、知らない人間が立つ

ていると「バレたか?」って思つてしまふようになつた、我ながら心の弱い男である。そんな心配とは裏腹に今日は見知つた綺麗な橙色の明るい髪と同じ色の瞳と目が合つた。

「真尋もランチか? 今日は天氣もいいし中庭でと思つていたのだが、一緒にどうだ?」

「いいほ、いほいほ(いいぞ、行こ行こ)」

『ウインナー＆マヨネーズパン』をお茶で流し込み残りの菓子パンが入つた袋とお茶を持つて司について歩きながら話を聞く。

なんでも咲希ちゃんに俺の事を紹介したいんだそうだ。

「でもいきなりだな、前々から会いたいと言つてたのをようやつと聞き入れてくれたのか?」

「いや、昨日咲希にお前の話をしたら、ぜひ会つてみたい! と言い出してな。兄としてはあの期待に目を輝かせた妹を裏切るわけにはいくまい」

「あ、結局咲希ちゃんのためなのね。なんか安心したわ」

その後はいい感じの木陰があつたのでそこで昼飯を食べた。途中、蟻の行列に司がビビり倒すなんて面白すぎることがあつたりもしたが、何とか時間内に食べきることが出来た…………まあ、授業には間に合わなかつたが

「帰り道」

赤のような茶色のようなく分からん色になつてきた街路樹の下を虫に怯えながら歩く司について行く

途中アップルパイが美味しいと評判のお店で噂のアップルパイを5つ購入、天馬家へのお土産と俺の分だ。

：甘いのあんまり得意じやないが大丈夫だろうか？無理だつたら司に食べてもらえばいいか

その後は問題なく司の家に到着した、緩やかな傾斜の住宅街の一件が天馬家のようだ

「ただいま！」

「お邪魔しまーす」

勢いよく玄関を開けつつもしつかり靴を揃えるところが司らしい……つて靴多くないか?

え、天馬家つて大家族なの??

「む、この靴は……どうやら一歌達が来ているようだな」

「一歌? どつかで聞いたことが……あ、咲希ちゃんの幼なじみの?」

「おお、よくわかつたな! もしやエスパーか!?」

「いや、お前が話したんだろ…」

確かに咲希ちゃんと仲のいい幼なじみが3人居て最近また寄りを戻して前よりいつそ仲良くなっている…って言つてた気がする。

「しかし、せっかく幼なじみが來てるのに俺が行つても大丈夫か?」

「むむ、確かにそうだな……とりあえず咲希に確認だな、一応近々紹介すると言つておいたから多分大丈夫だと思うが…つと、ここが咲希の部屋だ。咲希、今大丈夫か?」

司が扉をノックをしながら中に問いかける

「はーい、大丈夫だよお兄ちゃん」

「入るぞー：やはり一歌たちが来ていたか、よく来たな！ゆっくりしていつてくれ」

司の後ろから部屋の中を覗くとの差4人の美少女がいた。扉側に一番近い位置に座っていた綺麗な黒髪の子と目が合つた、恐らくまだ彼女にしか俺は見えてないだろう

「あ、司さん。お邪魔します……えっと、後ろの方は？」

「フツフツフツ、紹介しよう！ 我が友である真尋だ！」

凄く雑な紹介をされたが勿論それで納得できるわけもないのであらためて自分から名乗る。

「はじめまして、学校では司のお目付け役をしています、入相真尋です。よろしくお願ひします」

年下とはいえ初対面、それも女性なので敬語を使う……女性だと年下でも敬語使っちゃうのなんでだろ？

「あ、お兄ちゃんがよく話してた人だ！はじめまして、天馬咲希てんま さきです！いつも兄がお世話を
になつてます」

「おお、これがリアル咲希ちゃんか。途中から司が脳内で生み出したイマジナリーシステー
ターかと思つていたが……良かつた実在したんだな」

「はじめまして、噂はかねがね、色々と耳にタコができるくらい聞いてるよ」

「あ、あつはは…お兄ちゃん変なこと言つてませんでしたか？」

「俺の中では病弱だけど聖人君子の生き字引みたいなイメージになつてるよ、まあ会つ
てみてあながち間違いじやないかもつて思つたけどな」

「うえ！そ、そんな…アタシなんか、えつと…あ、ありがとうございます？」

うん、本当にいい子だ、話した印象が『いい子』つて感じる、全身から幸せなオーラ
が滲み出でるタイプの、周りも幸せに出来るタイプの子だな。

反応が良くてからかい甲斐があるところも司によく似ている

「あ、みんなのことも紹介しますね！いつちゃんにしほちゃん、そしてほなちゃんです！」

咲希ちゃんが3人いつぺんに紹介してくれる。先程目が合った黒髪の子はいつちゃん、銀髪のツリ目の子はしほちゃん、茶髪のなんか全体的にふわつてしてそうな子がほなちゃんというらしい。うん、他人の紹介の仕方まで似たような兄妹だな。

流石に幼なじみの方々も苦笑いしながら自分で自己紹介を始める

「星乃一歌(ほしの いちか)です。咲希の友達で、えつと・他は、歌が好きです。よろしくお願ひします」
「日野森志歩(ひのもり しほ)、よろしくお願ひします」

「はじめまして、望月穂波(もちづきほなみ)です。趣味は星を見ること・天体観測が好きです。よろしくお願いします」

黒髪の子が星乃さん、銀髪の子が日野森さん、茶髪の子が望月さんだな。よし、覚えた

「よろしくお願ひします」

と、挨拶したところで左手のアップルパイが入った紙袋に視線を向けられていることに気がつく

「……望月さん?」

「アップルパイ……え、あつ、はい!なんでしょう?」

ツツコミどころが多すぎるが、あんな羨ましそうな目をされたんだ。とりあえず

「あー、良かったら皆さんで食べま——「いただきます!」

かなり食い気味で返事を返されたので若干引きながら紙袋ごと渡す。元々お土産ようになつたものだ、幸か不幸か司の親御さんは家にいないようなので幼なじみの皆さんもらつた方がいいだろう

「穂波よくアップルパイつてわかつたね」

「え?匂いでわからなかつた?」

日野森さんと咲希ちゃんが首を横に振る。

普通わからんよな、アップルパイがそれだけ好きということか。そう考えると俺のお土産のチョイスは正解だつたようだ

「あれ？ 五つしかない」

と、ここで皆にアップルパイを配つていた望月さんの手が止まる。

あ、人数分買つてないわ

そんな重要なことに今気がついた、やはり俺のお土産のチョイスは正解だが個数は不正解だつたようだ、無念。

まあ、もとより甘いものは得意じないのでここは皆さんに食べてもらうよう促すが、誰も口を付けようとしない。やっぱり一人食べない奴がいると食べにくいやな：

「むう、仕方がない。ほら真尋、俺の分を一口やろう」

ずい、つと司が自分のアップルパイを俺の口元に持つてくる。流石にここまでしても

らつて『いらねえ』と突っぱねるのは申し訳ないので一口だけ齧る……が、やはり甘い。

「……コーヒー入れてもらつていい?」

「そんなにか!?

思つたより倍くらい美味しかつたがそれと同じくらい甘かつたのでコーヒーをねだる。

「ちよつと待つてろ」とアップルパイ片手に司がコーヒーを入れに1階に降りていく。やつぱり良い奴だな。

「あ、真尋さんもどうぞ座つてください。」

「お、こりや親切にどうも」

お言葉に甘えてあぐらをかけて座る

女性の部屋とはなんとも落ち着かないもので、自分が浮いた存在のように感じる何となく周りを見回すと四人の視線が集まっているのがわかつた

あ、これ知ってる質問攻めされるやつだ

予想は正しく、「司とはいつから友達なのか」、「何か趣味はあるか」、「アップルパイは嫌いなのか」、「変人なのか」等など色々と聞かれた。

趣味に関しては音楽が趣味と答えると質問がさらに増した
「楽器は弾くのか」、「歌は歌うのか」、「活動はしているのか」、「アップルパイは好きですかね?」

問答を繰り返していると司がコーヒーを持つて、戻ってきた

「ほら、コーヒーだ。ブラックでよかつたな?」

「ありがと、……美味しい」

その後は司も混じえながら女性達からの質問に答え続けた。

アップルパイハウイシイ

最近行つてなかつた行きつけの店

うとある休日、

学校も休みで特にすることもないのにCDショップを適当にぶらつく、暇な日に入り浸り過ぎたせいかすっかり顔馴染みになつたレジのお姉さんと一緒に二言話してから店内をうろつく。

ひと月前まではアイドル系統が置いていたところに結構激しめなロックバンドのジャンルが並んでいるところを見るに売り場の変更でもしたんだろう。

幸い目的であるボカロコーナー変わっていないようなのでふらふら歩いていく
適当にパッケージを眺めて気になつたら手に取り戻す、これを繰り返しながらなんか良さそうつと感じたらキープしてまたふらふら…

やはり人気ボカロさんは前面に出るので探しやすくて助かる。適当に三、四枚買つたら帰つて聞くか

——と、普通の人間なら思うだろう。

こここの音楽ショップは品揃えは申し分ないがお世辞にも広いとは言えない店なのでどうしても前面に出せるCDの量は限られる、そんな事情からマイナーな曲や人を選ぶような曲、更には有名だけど他にもつと有名すぎるのがある曲等は側面に埋もれがち

だ。

例えば……おお、あれは！最近人気がうなぎ登りなボカロPさんのCDを発見!!期待の新人ボカロPとしてデビューしてから初のアルバム、既にAmazon等のネット通販にはあまりでまわっていないことはリサーチ済み。

店側としてもこれから名が売れていくれば前面に出すだろうが今はその前段階、有象無象に埋もれた中でも手に取つてもらえるほどの魅力を単体で持つているのか、それを推し量つている段階だろう。

どうやらこれが最後の一枚みたいだ、早速手に取り迷うことなくキープ、というか確定で買——「あ、ラストだつたんだ」い：の、予定、なんだが。隣からはつい先日聞いた声が聞こえてくる。

声のする方向に顔を向けると先日と同じく綺麗な黒髪をした女性、星乃さんが少し悲しそうな顔で俺、ではなくその手元——CDに目線を向けていた。

「こんにちは、昨日ぶりですね」

社会人の基本である挨拶：朝の10時位つてこんにちはでいいのか？まあ、とにかく挨拶をすると心底驚いた表情で慌てて挨拶が返ってきた、多分俺の事には今気がついた

んだろう。ま、司や類みたいに印象深い見た目でもないしな、しようがないだろ。

しかし、星乃さんもこのCDに目をつけるとはお目が高い、中々見る目が…いや、聞く耳があるな。

と言つてもこれがラスト一枚であることは間違いない、さてどうするか……

「すみません、私入相さんだつて気が付かなくて…」

「ん？いいよいよ。気にしないで、それよりこれ、良かつたら譲るよ」

「え！良いんですか!!」

「ああ、今回は別にこれが目的で来たわけじゃないし、別に今すぐ欲しいって訳でもないからな。それと、呼び方は真尋でいいよ」

嘘はつかないが本音でもない、本当のことを言えば見つけた瞬間今日の目的がこれになるくらいには欲しいCDだが、「このCDは俺が先に取ったんだからな！」と言うのはいささか格好が付かなすぎる、端的に還元するなら男の仕様も無い見栄だ。

それに星乃さんは足音からしてこちらに一直線に向かってきていた、なおかつ前面のコーナーには目も触れずこのCDが置いてあるところまで迷わずに辿り着いた。パッケージ等を事前に調べていたんだろう、それくらい欲しがつている人がいるなら譲るの

もいいかなつて思えるもんだ。

「あの、やつぱり申し訳ないので結構です。元々は入相・真尋さんが先に取つていた訳ですしね。あ、それと私も一歌で大丈夫です」

「ここまで来といつて遠慮しない、ほら、これ持つてさつさとレジ並んできな」

「あ、でも！」

「ん、案外強情だな……そうだ！じゃあ半分ずつ出し合うのはどうだ？」

俗に言う割り勘だ、所有権は2人。CD本体は星乃さんに管理してもらつておいて俺はパソコンにダウンロードしたやつを聞くから大丈夫だ。

なに？ それなら本体を持つてる私が多めの2：1の金額でいい？いやいや、女性にそれが年下に多めに金を出させるなんて男として流石に情けないから却下。

もう：予想よりも強情、というか優しい子だな。困った、このままだとどちらも買わずに終了な展開が有り得てしまう。それは流石にもつたいなさすぎるので何とかして譲りたいんだが……「あの、よろしければ在庫確認致しましようか？」

不毛とも呼べる争い（？）をしているところに天明の光が舞い込む、いつもの店員さんがいつの間にやらほぼ真隣まで接近していた。

「お願ひしてもいいですか？」

「すいません、私からもお願ひします」

「かしこまりました！」

足早にかけていく店員さんを見送りながら微妙な空気が流れる、お互に譲り合つていたところに2つ目が出てくると何となく恥ずかしくなってしまう。

星乃さんも同じのようで少し気まずそうな表情で落ち着いていない。

そんな星乃……じやなかつた、一歌さんの視線が一点に集中したのがわかつた、視線の先に目を向けると綺麗な銀髪でジャージ姿の女性が一歌さんを見つめていた。

よく観察してみると2人の視線はそれぞれの髪に向いている、『憧れ』……と言うよりは『羨望』？お互いがお互いの髪に興味津々つて訳か。

見つめ合う美少女を観察する男……なんか悪いことしてる気分になつてきた。

「あ……」

「えっと、すみません」

「……いえ、こちらこそ」

「[...]」

美髪な2人を無言で眺めながら待つていると店員さんが2つCDを持って戻つてきた、つまりそういうことだろう。

「お待たせしました、はい、こちらお二つでよろしいですか？」

「ありがとうございます、そのままお会計して貰つてもいいですか？」

「…あ、別々でお願いします」

一歌さんも思考の海から帰つてきたようで一緒にレジに向かう。

先程の銀髪の女性も既にどこかに行つてしまつたようだつた。

初めから店員さんに聞けばよかつたな……

～昼過ぎ～

ビビッドストリート

あれから一歌さんと別れて適当に昼飯食つた。

久々に『麺硬辛め野菜ダブルニンニク脂マシマシ』を頼んだがさすがに昼からは重かつたみたいだ。食後のコーヒーを飲みたくなつてきたので久々に行きつけの、カフェ？バー？でもライブもしてるし：まあいや、『WEEKEND GARAGE』に行くことにした……行きつけなのに久しぶりとはこれ如何に。

壮大なグラフィティアートを眺めながら歩いていると目的の店が見えてきた、早速中に入る。

「いらっしゃーい。…つて真尋さん！お久しぶりです。父さーん！真尋さん久々に来てくれたよ！」

ドアのカラランカラランつて鳴るやつ……あれの名前つてなんなんだろ？ま、いいや。その音とほぼ同時に久々に聞く明るい声に出迎えられる。

「そうか。いらっしゃい、ゆっくりしてついてくれよ」

「お久しぶりです、謙さん。すいません、最近色々忙しくて……杏も久しぶりだな、最後に見たのは…何時だ？」

「多分私が入学して2ヶ月経つてからくらいだから、6月の初めくらい？」

つまりほぼほぼ4ヶ月は来れてなかつたということになる、最近は忙しかつたとはいえたなんだか申し訳ない気分になつてしまつた。今日は二杯頼むとしよう

杏に案内されカウンター席に、どうやら今はお客様が俺一人のようだ、夜はあんなに盛り上がるのに昼は静かだよな、（ここ）

「……今何か失礼なことを考えなかつたか？」

「いえ、全くもつてそんなことはございませんよ？あ、アメリカンコーヒーお願ひします」

カウンター越しに読心術を行使され内心焦つた。瑞希の気持ちが何となくわかつた気がする……

さりげなく注文を受けてくれた謙さんがコーヒーを入れる準備をしてくれる。あいにく俺は飲む専門なので何をやつてるかはあんまりわからんのだが、このコーヒーの香りが広がる感じはやはり好きだ。

「ご注文のアメリカンコーヒーだ」

「ありがとうございます……美味しい、やっぱりここいらじや一番美味しいですよ」

ほつと一息着く、やはりここのは美味しい。俺の家から少し離れているから絶妙に来るのが面倒な位置にあるんだがそれでも足繁く通つてしまふほどにはこの味に惚れ込んでしまつている。

「真尋さんなんで急に来なくなつちやつたんですか？」

「ああ、ちょっと用事が色々と増えてな」

「それは歌つてみた動画のことか？」

……ほんとなんで知つてんのこの人？え、怖、ごめん瑞希入れこんな怖いことしてたの？今度ちゃんと謝ろ

「ふうむ、久々に会つたが…相変わらずよく分からん目をしてるな、強いて言うなら『譲れないものを作り上げている』、そんな奴の目だ」

「いきなり人の顔をじつと見つめて何言い出すんですか、てかなんで動画のこと知つてるんですか？顔出しあはしてませんよ俺」

まあ、多分声でバレたんだろうな。この人ほんとに計り知れん

「ええ！真尋さん動画アップしてるんですか!? というか歌うんですか!?」
「歌うぞー、好きな曲ばっかりだけどな。あ、周りに言いふらすなよ？」

バレちゃつたもんは仕方ないので動画のチャンネルを見せる

『Soma』つて……うえ!?あの『Soma』だつたの!?すごいすごい!なんで教えてくれなかつたんですか!!

「うんうん、喜んでくれるのは嬉しいけど俺の携帯振り回すのはやめてくれ、 おいやめろ、 その手を止めろ」

「あつはははは!!」

元凶が何笑つてんだ、 張り倒しますよコノヤロウ……コーヒーブレンドお願ひします。

「ここにちは」

そんな悪い大人を睨みながらコーヒーを飲んでいると入口から先程聞いたカラランカラランという音が再度響く、 入口に目を向けると三人の男女が入店していた。

内二人の男子は見覚えがある…というか冬弥と彰人だつた。 司の近くにいるとかなりの確率でエンカウントする一人なので必然的にそれなりに話したことがある、 二人と

も中々にいい音楽センスをしているので話していく楽しいものだ

もう一人の女の子は…完全に初対面だな

「こんなにちは真尋先輩、こんなところで会うとは思いませんでした……真尋先輩がいるということはもしかして司先輩も来ているのですか？」

「ああ、こんなにちは冬弥。残念ながら俺一人だよ、彰人も学校ぶりだな。それと、初めまして、入相真尋だ、よろしく頼む」

「え、えっと……初めて、小豆沢あずさわこはねです。よろしくお願ひします」

「謙さんの笑い声が聞こえてきたから何かと思えば…まさか真尋センパイがいるとは思わなかつたですよ。なんの話ししてたんですか？」

その質問はとても答えにくいのだが……よし、杏と謙さんにも黙つてもらつておこう。

『話さないでくださいね』という念を込めて目配せをする。杏と謙さんはコクリと頷いてくれた。

「『実は真尋（さん）の歌つてみたを聞いてたの』」

「あんたら親子は俺を怒らせたいのか!?」

思わず台パンしながら立ち上がる、視覚の端っこで小豆沢さんがビクツとなつていて申し訳なかつたが正直それどころでは無い。カップが少し浮いたがコーヒー半分ほど飲んでいたおかげでこぼれることはなかつた

「真尋さんがあんな瞳で訴えてくるから『ぜひ俺の事を宣伝してくれ!』って思つてるのかと思つちゃつたよ」

「なんにも伝わつてなかつたな、おつかしいなあ俺さつき言いふらさないでつて言つたばつかだよな?」

「杏には言つていたが俺には言つてなかつただろう」

うるせ、子供かあんたは

はあ、最近：主に瑞希にバレた辺りから周りに気付かれやすくなつてているんだろうか？もう少し注意すべきか…

「歌つてみた：真尋先輩も音楽に詳しかつたですけど動画もアップしていたんですか

?

「……これだ、俺のアカウント」

「へえー、センパイ動画出してんですね。俺にも見せて：『Soma』つて、マジですか
センパイ!？」

「お前も杏と同じリアクションだな…それと、俺が言うのもなんだがいきなり大きな声
出すから小豆沢さんがびっくりしてるぞ」

「あ、いえ、大丈夫です。あの、入相…先輩？は杏ちゃんとお知り合いなんですか？」

「高校受験が終わつたくらいに、このコーヒーに出会つてな、それからは足繁く通わせ
てもらつてるんだ。杏ともその時からの知り合いだ、それと呼び方は真尋で大丈夫だ
ぞ」

「俺と彰人とは高校が同じなんだ、にしても真尋先輩があの『Soma』だとは思いませ
んでした。でも言われてみれば声質が同じですね。」

「そら本人だからな、あと絶対に、絶対に周りには言いふらさないでくれよ」

仲良し親子に念押ししながら三人にもお願ひしておく。

終わつたことは仕方ないので頭を切り替える。

「そういえば謙さんを除いたこの4人はどういう集まりなんだ?」

「ああ、真尋が最後に来たのは結成前だつたな。杏達は4人で『Vivid BAD S QUA D』というストリートユニットを組んでいるんだ」

「へえ…もしかして謙さんの影響か?」

「どうやらそちららしい、全く。我が娘とその仲間ながら将来が楽しみだよ」

えらく嬉しそうに笑う謙さん、俺が来なかつた4ヶ月間の間に色々とあつたようだ。

「あ、そうだ! 真尋さん、良かつたら今から歌いませんか?」

と言ひながらマイクを持つてこつちに来るのはほとんど強制してるようなもんだろ
…いや、全然歌うけどさ、好きだし

「いいけどどんな曲歌うんだ?」

「えつと…あ! これとかどうですか?」

「これって…」



「今度俺と冬弥で歌う曲じやねえか」

幸い知つてゐる曲なので歌える、てかボカラ口入つてるんだな。マイクを握つてステージに足を運ぶ。今のところお客様が来る気配はないので迷惑にはならないだろう。

「一曲だけだぞ?……



フフフ、どうだつた?……ん?」

練習無しだつたんで不安だつたが歌いきることが出来た、それはいいんだが彰人と冬弥がボーッとしてる。大丈夫か?

「すつげえ……でも!」

「ああ、負けられないな、彰人」

…どうやら男の子のスイッチを押してしまつたらしい。

この後は最終的に杏とこはね（本人に呼び捨てにしてくれと頼まれた）も交えて夕方まで歌いまくった。

友達の誘い方（初級編）で予習はした

（神山高校2—A）

「真尋は今度の休日なにか予定はあるか？」

昼休み恒例である購買ダッショを決め目的の『特製ソースカツサンド』をゲットしモソモソと食べていると隣にいる司から声がかかる。

なんでも今度司がバイトしている『フェニックスワンドーム』でシヨーをやるらしくぜひ見に来て欲しいとの事でチケットを4枚も貰った。

司が所属する……というか立ち上げた劇団、『ワンドーランズ×ショウタイム』のメンバーの一人がかの有名な鳳財閥の娘さんらしい、あれ？『フェニックスワンドーム』って鳳財閥の……あ、そゆこと。ホントこいつの人脈どうなつてんだ。

休日は基本暇なのでチケットは受け取りはしたが俺の分を抜いて残り3枚。司や類が誘えないとなると先生方が肉親しか説く人物がいない友好関係が比較的狭めな俺

に3人の仲間を探せとはなかなか酷なことを言うな。

……せめて放課後までには誰を誘うか決めておくか

結局誰を誘うか決められず放課後になつてしまつた。司はショーやの練習をするらしくチャイムとともにバイト先に直行、置いていかれた俺は一人寂しくうんうんと悩みながら歩いている。

「あれ？ 先輩じやん！ やつほー！」

……つとそこに最近よく聞く声がひとつ。

瑞希か、そういえば二ーゴつて四人グループだつたよな。

瑞希に、チケットを貰つてからの話の旨を伝え、二ーゴさんの4人でショーやを見に行かないか、とチケットを差し出したが

「ダメだよ先輩、先輩が貰つたチケットなんだから先輩が見に行かないと意味ないよ」

と、至極真つ当な事を言われてしまつた。

確かに、我ながら悩みすぎて大事なところが抜けてしまつたようだ。でもそうなると誰を誘うべきか？……また同じ悩みに戻つてきてしまつた。

いや、までよ？ 目の前に1人いるじゃないか。幸い休日暇そうなやつ（失礼）だし多分OK貰えるだろ。

「なあ、瑞希は今度の休日暇か？ 暇なら1枚貰つて欲しいんだが」

「先輩が行くなら行くよ！」

「これで残り2枚、さて誰を誘うか…」

「先輩、もしかして友達少ないの？」

「……少ない訳じやないぞ？ 誘つてくれた司と類がショリーに出る当人つてだけで普段なら真っ先にあの二人に声をかけるんだが今回はたまたま、たまたま！ 誘える人間がいかつたつてだけで別に普段からあの二人以外とはほとんど話さないとかじやないし、なんなら体育のゴリ先生に『俺、最近気になってる人がいるんだが……』って恋愛相談されるくらいには教師陣とは仲がいいんだぞ？ お前知らんだろ体育のゴリ先生と美術の先生が両思いだけどどっちも『嫌われたらどうしよう……』っていうそこら辺の生徒よりも甘酸っぱい距離感にあること知らんやろ？ それにクラスの人達だつてたまに話せない訳じやないし、なんなら今日だつてクラスメイトに『数学のノート集めてるんだけど

ど課題やつた?』って聞かれたし、それに最近は杏とか冬弥ともよく話すようになつて
るし別に友達が少ないわけじゃないぞ?』

「あく、あつはは……なんかごめんね? というか先輩、杏とか冬弥くんと友達だつたんだ
!!だつたらその2人誘えればいいんじゃないの?』

「……」

ド正論を食らい押し黙つてしまつたが全くもつてその通りだ、人を遊びに誘うなんて
ほとんどやつた事なかつたから視野が狭まつていたのか?

幸い休日までまだ日はあるので後日杏達を探すことにしてよう。

瑞希とは途中まで一緒に帰つたがずっと今制作中の曲の話をしているだけだつた。

（翌日、朝）

「風紀委員です。服装の検査にご協力お願いします……」

清々しい日本晴れの下。眠気眼で学校の校門付近を通過すると、えらく棒読みで声をかけられた。

視線を向ければ見知った顔がプリントを挟んだボードとボールペンを持ち。珍しく制服の第一ボタンもしつかり締め、更にはブレザーのボタンまで締めている。なれない丁寧な口調で呼びかけている所為かなんとも言えない顔でこっちを見ていた。

「おはよ、杏。そういえば風紀委員だつたな」

「おはようございます、真尋さん。我ながら似合つてないとは思うんですけど……なつちやつたものはしようがないですから。とりあえず、服装検査しますねー、と言つてもざつと見た感じ大丈夫そうですね」

襟元、第一ボタン、耳元、靴下、等などを指差ししながらチェックすると「おつけー」と呟きながらこちらに向き直る。

「やつぱり大丈夫ですね、ブレザーのボタンは今日の全校集会の時は締めてください。はい、じゃあ通つていいですよ」

「あ、その前に……」

チケット2枚渡しながら司に貰つてからの話の旨を伝える。

「休日……明日ですよね？特にイベントもなかつたからお父さんに手伝い頼まれない限りは大丈夫だと思うけど……でもなんで2枚？」

「杏の方から冬弥か彰人のどつちか都合のいい方誘つてくれ。同じ1年だし会う機会多いだろ?」

「私は良いけど、真尋さんは良いの?」

「何が?」

「いや、こういうのって本人が誘つた方がいいんじゃないかなーって……」

「……」

先日と同じようにド正論を食らい押し黙つてしまつたが今回も全くもつてその通りだ。そもそもそれだとどつちが来るのか連絡貰わないと俺も当日まで分からないし、もし2人とも都合が合わなかつたら杏が一番困るだろ。

諸々踏まえて一言謝りながらチケットを1枚返してもらい懐にしまう。

「じゃあ」とお互に一声かけて教室に行こうとしたが一つ気になつたので聞いておいた

「杏、お前ピアス付けてるけどいいのか?」

「え!ほんとだ気づかなかつた:癖でつけてきちゃつたのかな?」

＼
昼
休
み
＼

頑張れ風紀委員
：

司に「中庭で俺と共にランチタイムと行こうではないか!」と言われたが、生憎あともう1人を誘うためにバス。昼食も少し急ぎめに10分もかけずに済ませ1年の教室に向かう…が、そこでピタリと足を止める。

……冬弥と彰人つて何組だ?

1年だから1階の教室なのは間違いないんだが。まあ、A組から順番に行くか。他学年の教室に入るのなんて初めてなので少し、いやかなり緊張しながらドアを開けようとすると、何と自動で開いた。

一瞬「自動ドア? 1年の教室は便利だな」なんて馬鹿なことを考えたが普通に人が中から開けたみたいだ。

かなり驚かれたが「青柳と東雲つて何組かわかる?」と聞くと「多分、青柳はB組で東雲はC組だと思います」とちゃんと答えてくれた、いい子で良かつた。

さつきの子にお礼を言いB組に向かうと廊下側の窓から冬弥と彰人が机を囲んでいるのが目に入った。さつきの人が言っていることが正しいなら、彰人がパンと紙パック持つて冬弥のいるクラスに来たんだろう…なんか可愛いな。

と、そんな俺の思考を察知したのか、彰人がこちらにちらりと目を向ける。冬弥もそれに気がついたようで食べる手を止めてこちらを向く。見つかったので教室に入り2人の元まで行く

「どうしたんすかセンパイ、1年の教室に来るなんて珍しい…てか初めてじゃないつすか」

「ああ、実は冬弥と彰人に聞きたいことがあつてな。明日の休みつて暇か？」

「明日ですか？俺はイベントもないでの何も予定は無いですね」

「あー、明日はちょっと用事が…」

どうやら明日暇なのは冬弥だけらしい、こちらからすればありがたいな。というわけで冬弥にチケットを渡しながら概要を説明すると…

「是非ッ！行かせてくださいッ！」

両手でチケットを力強く受け取りながら快く了承してくれた……この様子なら公演時間教えたならチケット渡さなくとも自腹で買って行つたんじゃないかな？

「てかセンパイ、今回は俺が用事で行けませんでしたけどもし俺も行けるつてなつてたらどうするつもりだつたんすか？」

「全く考えてなかつた、それより用事つてどつか行くのか？」

「まあ、ちよつと朝一から家族と食べに出かけるだけですよ」

「ああ、お姉さんとチーズケーキを一緒に食べに行くんだろ？なんでも数に限りがあるとか」

「ば！冬弥、お前、言うんじやねえよ!!」

「？……何か間違つたことを言つたか？」

「いや、間違つてねえけど…そうじやなくて、あーもういいや、めんどくせえ」

……前々から思つていたが冬弥つてクールキャラなんじやなくてド天然キャラなんじやないだろうか？

にしてもなるほどな、確かに高校一年生という多感な時期に『お姉ちゃんとケーキ食べきます！』とは言い難いわな、現に顔が真っ赤になつてる。写真：はフラッシュとがでバレるから動画撮つて杏に送つとこ

渡すものは渡したので冬弥と彰人に一声かけて教室に戻ると司が中庭から戻つて来ていた。

「あ、そういうえば明日のショーツて何時から始まるんだ？」

「む、そういえば伝えていなかつたな。明日は11時が1番始めのショード、そこから1時間30分毎に合計で5回ショードを行う」

「ほー、5回もやるのか、大変だな。空いてる時間帯とかあるか？」

「ふつ、スターたる俺が主演を務めるショードぞ？ 常に客席満席状態よ！ フハハハハ！」

「（後で類に聞こ）……」

放課後、類に穴場時間を聞きに行つたがどうやら本当にほぼ席は埋まつているらしい。昼時とかは空いてるかと思ったが食べ物片手に見に来る人が結構いるみたいだ。

その後は類に感謝を伝え帰路に着いた、疑つてすまんな司

帰宅後

すぐにPCを起動、ナイトコードじゃない方のトークアプリを立ち上げグループを作成。冬弥のアカウントは知らないので瑞希と杏だけを招待して待機。

ANSWER

『マヒロさんがmizuki☆さんとANさんを招待しました』

mizuki☆：『やつほー、残り2人誘えた？』

マヒロ：『おー、無事誘えた。というかこっちの名前はAmi aじやないんだな』
mizuki☆：『さすがにね、一応秘密にしてる訳だし。あとの一一人にも言わないで

ね?
』

『ANさんが参加しました』

AN：『お疲れ様です、真尋さん。動画感謝です』

mizuki☆：『お、杏じやん！おつおつ～、動画って何の話？』

マヒロ：『おつ、動画は秘密だ』

AN：『瑞希じやん！先輩つて瑞希と知り合いだつたんですか？』

マヒロ：『色々あつてな、それより冬弥のアカウント知つてるか？知つてたら招待して欲しい』

『mizuki☆さんがtoyaさんを招待しました』

『ANさんがtoyaさんを招待しました』

mizuki☆：『あ』

AN：『2人で招待しちやつたね（笑）』

『toyaさんが参加しました』

toya：『お疲れ様です』

マヒロ：『おつ、これで全員だな』

toya：『2人からいつぺんに招待が来たのでびっくりしました』

mizuki☆：『あつはは、ごめんね』

AN：『ごめんごめん』

マヒロ：『それで明日なんだが集合場所はどこにする？』

t o y a :『俺は何処でも構いませんよ』

m i z u k i ☆ :『ボクもどこでもいいかな』

A N :『じゃあ現地集合でもいいんじゃないですか？』

マヒロ：『一応11時から一回目のショーケースが見れるみたいで、それから1時間30分毎に5回ショーをやるんだってさ。』

m i z u k i ☆ :『じゃあみんなでなにか食べてから行こうよ！』

t o y a :『食べる物ならパーク内にあるんじやないか？』

A N :『ああいうところは値段が高いから：そういうことなら私も外で食べて行つた方がいいと思うよ』

マヒロ：『え、そうなの？あんまり行つたことないから知らんかった』

m i z u k i ☆ :『ヤバいよ、自販機の水が200円するんだよ』

t o y a :『富士山と同じだな』

マヒロ：『……ファミレスに11時30分頃集合でおk？』

m i z u k i ☆ :『おけー』

A N :『異議なーし』

t o y a :『了解です。ちなみに、富士山の自販機は登れば登るほど高くなるみたい

で5合目では200円、6合目では300円、7合目では400円、8合目から頂上で
は500円になるみたいですよ』

マヒ日記

m
i
z
u
k
i
☆
:
^
|
!
└

：「絶対水持つて登らないとダメじやん」と

その後はためになるようなならないような雑談をしてから明日に備えて早めに眠る

ことにした。

……富士山に水いっぱい持つてつて売つたら儲かるかな？

混ぜるな飲めん

（休日・朝）

約束の休日、平日よりも遅い時間に軽めの朝食を流れていくニュースを眺めながら食べる。

チラッと右上の時刻を見ると時刻は9時20分：あ、今21分になつたな。

我が家から集合場所のファミレスまではのんびり歩いて4、50分程度。集合時間が11時30分、10分前には着いておきたいから、余裕もつて10時過ぎに出るか。

女性の場合、出発まで残り40分程度となると慌てるんだろうが俺からすれば十分余裕のある時間だ、なんならゆっくりトイレに座れる。

頭の中で雑な朝の予定を組みたてながら口の中に残ったトーストをコーヒーで流し込む……うん、美味しい。

食べ終わつた食器を台所の流しに運び水に浸しておく、洗うのは：帰つたらでいいか。父、母は両方共仕事で朝から家にいない。多分帰つてくるのも俺が先になるだろうから置いててもバレないバレない。

流しに食器を運んだその足で洗面所に向かう。

少し髪を濡らしてドライヤーで乾かしながら寝癖とか整える、そこにうつすらとワックスをシャシャシャーって適当にして準備完了。

腕時計を確認するとあと30分以上余裕がある。

暇だしソシャゲのログボ回収でもしながら待つとしよう。

（ファミレス付近）

時刻は11時24分。入相真尋、絶賛走行中である。

まさか家の鍵が行方不明になるとは思わなんだ、てつきりいつもの玄関の箱に入れると思つてたんだが。学校のカバンに入れっぱなしになしだつたとは、我ながら不注意な男だ。

で、結局見つけた頃には走つたら間に合うくらいの時間になつていた。

「ハツ、ハツ、ハツ……ッハ、ハツ、ハツ」

あー、絶対明日筋肉痛だ。嫌だなあ……座つたり立つたりするときの痺れるような痛さが特に嫌だなあ……

目的のファミレスの入口で止まれるよう息を整えながらスピードを落としていく。

時間は11時27分、5分前行動は無理だつたみたいだ。ガラス越しに外から店中を見てみると冬弥と瑞希はもう来ているみたいだ、杏の姿は見えないが……

少し急いで中に入り皆の元へ向かう、どうやら杏はまだ来ていないらしい。なんだか少しだけ損した気分になつた。

「2人ともおはよ。すまんな、少し遅くなつた」

「おはようございます先輩。俺と暁山も今来たところなんで大丈夫ですよ」

「おはよー、まだ集合時間じゃないしね。ほら、11時28分」

瑞希が指さす方向にある時計は確かに28分。それでも誘つた側の人間としては、何となく先に到着しておきたかった。

どうやら2人も本当にいまさつき着いたばかりらしい、たまたま近くで合流したのでそのまま一緒に來たようだ。

と、ふと外に見知った髪飾りをつけた黒髪が靡いているのが見えた。

時刻は11時29分。白石杏、絶賛全力疾走中のようだ。

勢いを殺さず店内へ入りこちらに駆け足、そのまま瑞希の隣の席に滑り込む。当然瑞希はその勢いをモロに受けるわけで……

「え、ちよ、ちょっと杏! 止まつ……グヘツ」

「セーフツ!!はー、危なかつた。時間は…30分ジャスト!」

「隣で1人、ダメージ的にアウトになつてるけどな。おはよ杏」

「白石、もう少し余裕を持つて行動した方がいいぞ」

「あつはは…ごめんごめん、ちょっと準備に時間かかつちゃつてさ。瑞希もごめんね?」

大丈夫??」

どうやら杏の方も何かあつたらしい、とりあえず全員来たのでドリンクバーと飯を頼もう。食パン1切れのエネルギーはさつき使い切つた。

冬弥がメニューを取つてくれたがどうやら2つしかないようだ。まあ、ファミレスとかつて普通2つだよな。

「先輩、一緒に見ましょう。そっちの方が早いですよ」

「ん、それもそうだな。みんなドリンクバーはいるだろ?」

「もちろん!……あ、今マロンフェアやつてるんだ!」

「……先輩、ボクもお願ひ」

瑞希も何とか復活したみたいで杏とメニューを見ている。……どうやら脇に食らつ

たらしい、痛そ。

どうやら冬弥と杏は決まつたらしいが瑞希はまだ悩んでいる。ちなみに俺はカツ丼の定食だ。

「何と何で悩んでんだ？」

「んう、グラタンにするかオムライスにするかで……ポテトは確定なんだけどね」

ポテトは確定なんだ……みんな好きだもんな、ポテト

結局オムライスに決めたらしく店員さんに注文。

ドリンクバーを3人に任せ俺は荷物番だ。

「はい真尋さん、これどーぞ」

「おう、ありがとな」

戻ってきた杏が渡してくれたのはメロンソーダ、なんでもいいとは言つたが随分と子供っぽいのをチョイスしたな……美味しいから好きだけど。

受け取つて一口、口に運べばそこに広がる炭酸の一――「……ツン！ 何これ！ まづ!!」

「いえーい！ 大成功♪！」

「おお、まさかここまで上手くいくとは」

瑞希と杏の仕業らしい、てか何入れたこれ？ どうやつたらこんなに苦くなるんだ？ ニガリか？ ニガリでも入れたか??

「……何入れたんだこれ？」

「メロンソーダとノンシュガージャーエールだよ、ねえねえどんな味する？」

「……まず口に入れた瞬間は一瞬メロンソーダの香りがする、でも舌に触れた瞬間強烈な苦味が口いっぱいに広がる。正直ジンジャーの味は全くしない……てか冬弥、止めてくれても良かつたんじやないか？」

「すいません先輩、どれにするか悩んでいて……気がついたら混せてました」

ドリンクバーをどれにするか悩む冬弥：すげー想像しやすいな、横から彰人とかに勝手にボタン押されてそう。

あとこれは瑞希と杏に飲ませよ、てか飲め。

結局4人全員一口は飲みその形容しがたい苦味に悶えていたところに料理が来た。どうやら同時に注文したのもあるのか全部同時に到着した。

「真尋さん箸取つてください」

「あれ？、先輩、おしほり2個使つてない？」

「あ、済まない。俺が2個持つていた」

「なんで真っ先に俺を疑つたんだ……はい、箸。いただきます」

カツ丼のカツにかぶりつき味を噛み締めていると瑞希が全く料理に手を出していいのが目に映る。

「どうした瑞希、食べないのか？」

「ボクって猫舌でさ。熱いのダメなんだよねー、あ、ポテトはみんな食べてもいいから」

ほー、瑞希は猫舌だったのか、見た目の雰囲気とか性格とかも相まって本当に猫っぽいな。

お言葉に甘えてポテトをひよいひよいと口に運ぶ。

何これめちゃうまい、こここのポテトこんなに美味かつたのか……手が止まらんな
横を見ると冬弥もモソモソとポテトを頬張っていた。こいつは多分美味しいと無言で食べ続けるタイプだな、何となくわかる。

「ちよつとー！先輩と冬弥くん食べ過ぎー、ボクの分ちゃんと残しておいてよね？」

「わかってるわかってる、このカリカリしたやつは全部貰うからそれ以外は全部残しつくよ」

「俺は皮が着いているやつだけ貰おう」

「それ2人が好きなだけでしょ！」

「よくわかつたな」

「ハモるなー!!」

「ケチャップの方が美味しい…」

うん、打てば響くとはまさにこの事だな。にしても冬弥もなかなか…今後はもつと仲良くなれそうな気がする。杏はずっと何につけて食べるか模索しながら食べてるしな。

「とりあえず、食べ終わったら出発するぞ」

3人からの返事を聞きつつ自分のカツ丼を食べることに専念する。

「先輩、デザートも食べていい?」

「食べ切れる分だけにしつくんだぞ」

「はーい」

『親子か……』

「おお、すげーな」

「フェニックスワンドーランド入口前」

国内有数の人気テーマパーク、彼の鳳財閥が運営しているらしく休日はもちろん平日でもかなりの客数が入園しているらしい。

そして本日も例外なく大繁盛なようで入口付近にもそれなりに人が集まっている。内心人混みに若干げんなりしつつ何となく深く息を吸う。

「おーい、早く中入ろうよ！」

「ほらほら！冬弥も真尋さんも置いてきますよー!!」

そんな俺とは違ひ元気溢れる2人は先にゲートの方に走つていった。置いていかれる訳にも行かないでので冬弥と一緒に園内に向かう。

「先輩、大丈夫ですか？」

「ん？ああ、大丈夫大丈夫、ちよつと人混みに萎えてただけだから。体調悪いとかでは無いよ」

「そうですか、なら良かつたです。もししくなつたりしたらすぐに言つてくださいね」

オカンな冬弥に心配されまくりながら司に貰つたチケットを使い無事園内へ、中はまさにザ・テーマパークつて感じで観覧車やらジエットコースター、メリーゴーランドにコーヒーカップのなんか回すやつなどなど、思いつく限りのアトラクションが満載だつた。

先に入つていった瑞希と杏は……いた、どうやらパンフレットを取つてきてくれたみ

たいだ。なんて有能、普段もそれくらいいい子なら補講も受けずに済むのにな

「先輩今なにか失礼なこと考えなかつた?」

「んや別に? それよりどうする、今が1時過ぎだから次のショーやの公演まで1時間くら
いある、それまでどこかまわるか?」

「私ジェットコースター乗つてみたい!」

杏いわく、このジェットコースター……『フェニックスコースター』は最近かなり有名らしくそれ目当てで来る人もいたりいなかつたりするくらいには人気らしい。

それは確かに1回くらいは乗つておきたいのでみんなで乗ることにした。

それなりの列を並び終えいざ乗車、順番的に冬弥と一緒に1番前の席に。

座席に座り安全バーを下ろす……なんかドキドキしてきた。高いのとかそこまで苦手なわけじやないけどちよつと怖い。徐々に高度が上昇していき緊張感が張り詰めてくる……が、後ろに座つてる瑞希と杏がキャイキャイ叫んでるのでなんか逆に安心して

きた。

やけに静かな冬弥はと言うと高い場所から見る景色に少し見とれているみたいだ。

それに習つて何となく当たりを見下ろしてみるとショ―に使うようなステージがあるのを発見、誰かいるようで何か動いてる。よく目を凝らして見てみると……

「あ、司だ」

「！どこですか？」

「ほら、あそこ。木に囲まれたステージでなんかやつてるやつ」

「く、こつち側だと微妙に見えない……」

「そんな必死にならなくとも、後で目の前でみれるんだからさあああああああああ

あああ!!!」

!!!!!!」

『反転』『加速』『強風』『浮遊感』『圧迫感』

いつの間にやら頂上に着いていたジエットコースターが一気に降下、色々な情報が頭
ん中に入ってきて逆に頭ん中空っぽにならしきだつた。そんなせいか一瞬だけ、
『そういえばジエットコースターにかかるGは3G～5Gって聞いたことあるな……そ
もそもGってなんだ？』

というどうでもいい思考が頭をよぎったが1秒足らずで現実に引き戻された。縦に斜めに横に上下に、グワングワンガクンガクンなりながら何とか終着点へ。フラフラした足取りで近くのベンチに座り込む。

「……先輩」

「……なんだ？」

「俺、ジエットコースター苦手かもしれないです」

「奇遇だな冬弥、俺もだ」

後輩との絆が深まるのを感じながら自身の新たなる一面を文字通り頭の先から足のつま先まで全身で味わい尽くした。

隣で多少グロツキーになつてゐる冬弥を後目に後ろに座つていた2人を確認すると、どこからか取りだしたポップコーンを二人で食べながら楽しそうに話していた。

「めつゝちや楽しかった!!」

「うん！特にあの後連續で3回転するところとか、ボク楽しすぎて手あげちやつたもん！」

「私はやつぱり最初の90度以上越えの急斜面！さすがのスピードでめっちゃ楽しかった!!」

なんでそんなに元気なんだ……降りる時だつて、俺ら以外の乗客もそれなりにグロッキーな状態になつていたがこの2人だけはスッと立つてスタスタスタートつて歩いていくんだからホントびっくりした。

今だつてパクパクとポップコーンを口に運ぶ二人を隣で冬弥が信じられないものを見る目を向けている。

とりあえず、今は少し動けそうにない……

あれから少し休憩を挟んでショーを行うステージに向かうことにした。

主に休憩と待ち時間のせいで思つたより時間を取られてたが時間的には丁度いいので良しとしよう。

木々の中にある道を歩いていると一際開けた場所に出た。

そこには恐らく今回司たちがショーを行うであろうステージが待つていた。多少傷んでいたりはするが不快感はなくそれどころか味がある雰囲気を感じさせるいいアク

セントになつてゐる。

現在は開演時間の10分前だが前列の席は類が言つて いた通りほぼ満席。できるだけ近くで見たかつたが仕方がない、今日は真ん中くらいの席に座るとしよう。

「私こういうショードを見たりするの初めて！文化祭の時も風紀委員で行けなかつたし」

「そうか、白石は司先輩の雄姿をまだ見た事がないんだつたな。よく見ておけよ」「冬弥は相変わらずだな」

「文化祭のやつはすつごい面白かつたよね！今回も楽しみ〜！」

「……！司先輩が出てきた！！そろそろ始まるぞ」

冬弥の声で視線をステージの真ん中に戻す

「皆様！本日は我が『ワンドーランズ×ショウタイムズ』のステージに――

舞台袖から出てきた司が挨拶をしてくれている。こうして見るのは2度目だが序盤はしつかりと常識的で理解できるんだけどな……

「ふはははは！ 行くぞ！」

という司の掛け声とともに落雷、一応上を見て天気を確認するが晴れ。舞台袖をチラツと見ると類が恐らく遮光レンズが入っているであろうサングラスをかけながら何やら装置をゴチャゴチャしていた。

今のところ『ドローン』『ロボット』『発光』『雷』等々、かなりハチャメチャなショーになつていて。そして何より凄いのがハチャメチャなのに惹き込まれる魅力が溢れていることだ、正直訳分からんがめちゃくちゃ面白い。

中盤を超えていよいよクライマックスへ、序盤の常識はとつくにどこかに行つてしまつたがリアリティ溢れる演出のおかげか手に汗握る展開となつていて。

ここから一体、どうなるんだ……！

時間にして30分程度のショーを終えたワンドーランズ×ショウタイムズに拍手喝

采が贈られる。

他の3人もかなり楽しめたようで特に冬弥はずつとショーンの……というか司の感想を呟いている。

ショーンも終わつた事だし声くらいはかけておこうと思いステージに視線を向けると、何と司と類がバルーンアートを子供たちに配つていた。

さすがの体力だな、今行つては邪魔になつてしまふだろうからやめておくか

「あ、バルーンアートだ！かわいい、ボク貰つてこよ～つと」

「司先輩が作つたバルーンアート！？ぜひ貰わねば!!」

と思つたが約2名が駆けて行つてしまつた、杏の苦笑いと顔を合わせながら本日のスターの元に向かう

「お疲れ様司、かつこよかつたぞ」

「ふはははは！当然だ、何せ今日の俺はスーパードラマだからな!!」

よくわからんが調子いいことはわかつた。

「おやおや真尋くん、僕に労いの言葉は無いのかい？」

「類もお疲れ様、ドローンとか雷とか全部お前の発案だろ？」

「あつはは！もちろんだとも、上手くショーに組み込めていただろう？」

「ああ、最高だつたよ。次も期待してる」

その後は次のショーの準備があるらしく2人とは別れた。18時には片付けも終わっているらしいので、それまでは園内を4人で楽しむとしよう。

昔は楽しかつたけど今乗ると地獄を見ることもある

「フェニックスワンドーランド」

地上から約100メートルの上空から西の地平線に沈む太陽を眺める。空は赤らみ、眼下に広がる町はまるで燃えるように見える。それはまさしく幻想的で……成程、観覧車で告白するカツプルの心情が今ようやつとわかつたような気もする。

と言つても俺に関しては「これって左右に動いたら揺れるのかな?」「ちよ、瑞希やめなつて!」「……（景色に感動してる）」とムードの欠けらも無い騒がしい雰囲気で満たされている。つてかほんとに元気だなこの2人。

瑞希のせいで左右に動く観覧車の中から外を眺めていると携帯に着信が入る。

|||||||

TSUKASA：『今ショーオ片付けも全て終わつたんだがまだ園内にいるか?』

マヒロ：『今は地上800メートルくらいにいる』

TSUKASA：『……観覧車か?』

マヒロ：『正解』

TSUKASA：『回りくどい言い回しをするな！とりあえず観覧車のところで待つ
ていてくれ』

マヒロ：『いいけど、忘れ物でもしてたか？』

TSUKASA：『いや、うちのメンバーのひとりが園内を紹介したいんだそうだ』
マヒロ：『結構色々乗ったけどまだまだ体力ありそうなのが2人ほどいるからこちら
としては助かるが…疲れてんじゃないのか？』

TSUKASA：『未来の大スターの体力を舐めるなよ？ふはははは！観覧車を降り
たら近くのベンチで待っているが良い!!』

マヒロ：『おk、ありがとな』

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

チャットアプリを閉じて外の景色を見たがもうほとんど遠くの景色は見えなくなつ
てしまつていた。

多分今が4分の3程度の位置なのであとは降りていくだけだろう。

「はい、ちゅーもーく」

「なになに、いきなりどうしたの先輩？」

「今司から連絡があつてな、メンバーの一人が園内を案内してくれるそなんだ。どうせ夜までいる予定なんだし頼むことにした」

「司先輩もいる……ということですか？」

「いるぞ……ガツッポーズするのはいいけどあんまり揺らすなよ、ただでさえさつき瑞

希が揺らしてたせいできちつと気持ち悪くなつてるんだから」

「真尋さんがずっと外見てた理由つてそれだつたんですね」

うだうだ駄ベリながらも3人からOKは貰えた。

話している間に観覧車は一番下まで到着したようであの人が鍵と扉を開けてくれた
……観覧車つて乗る時と降りる時が1番勇気いる気がする。止まつてないのに飛び乗つたり降りたりするの普通にちよつと怖い。

観覧車から降りて近くのベンチに向かうと既に司とピンクの髪の女の子が待つていた。てか早くね？ステージからここまでそれなりの距離があるから待つつもりでいたんだが……もしかして走ってきたのか？

「おーい、司。やけに早いな？」

「はあ、はあ……え、えむのやつがいきなり走り出したんでな。1人先に行かせる訳にも行かんので追つてきたんだ。」

成程、となると類と草薙さんは歩いてきてるんだろうな。類はともかくとして草薙さんは激しい運動苦手そうだし。

唯一の初対面であるピンクの髪の女の子は早速瑞希と杏の3人で話していくが俺の方に視線を向けるとパッと花が咲くような笑顔を向けてくれた、この子絶対いい子やん。

「ねえねえ！キミが司くんと類くんのお友達？あたし鳳おおとりえむ！よろしくね!!」

「入相真尋だ、いつも司や類がお世話になってるな。友人として感謝するよ」

「おい、いつオレがえむの世話になつたというのだ」

「えつへへ、それほどでも～！」

「えむも照れるな！」

面白い子だな、多分年下だろうが……鳳か。

あー、なんか司が鳳財閥の娘さんがメンバーにいるとか言つてたような気がする。

でも会つて見た感じ『お嬢様』つて感じは全くないな、友達に一人いると元気になるタイプの子だな。

とりあえず全員自己紹介を終えたので類と草薙さんの到着を待つことにした……飲み物買つてこよ。

ちよつと高めの自販機で水を買つて戻つてくると類と草薙さんの2人も既に待つていたが……みんな自由だな。冬弥は司の武勇伝を今日も聞いてるし、杏と草薙さんは鳳さんに学校での様子について色々聞かれているみたいだし、類は瑞希と何やら随分と親しげに話している。

傍から見てのも楽しいがその気持ちを抑え小走りで集団の中に向かう。

一言謝つてから類と草薙さんに挨拶。

鳳さんの『レツツ、わんだほーい!!』の号令のを皮切りに園内の案内を初めて貰つた。

鳳さんの先導のもと、手始めに近くにあつたお化け屋敷に入つてみたんだが……あれ

だな、1人めっちゃビビってる奴がいると逆に落ち着くつてやつはホントだつたんだな。杏のおかげで、といふかビックリしても杏が先に悲鳴を上げてくれるから冷静になれた。

叫び続ける杏に何故か1番前を歩かせながら無事外に出る。

「はあ……。そ、そこまで怖くはなかつたね」

「そうだつたのか？全力で走つて逃げていたからてつきり怖いのかと思つていたが……」

「めちゃめちゃ面白かつたね」、特にコンニヤクが杏のおでこにピタ……つてなつた時が最高だつたよ！」

傍から見てたら『何故コンニヤク？』つてなつたが見事に食らつていた杏は『ひあやつ！？』と普段の言動からは感じられないなんとも可愛らしい女の子な悲鳴が漏れていた。もちろん録音しておいた、後で彰人と謙さんに送る。

瑞希は大爆笑していたが冬弥は悲鳴の発生源が分からずそつちにビビつてた。
俺としては何が起きててもずっと笑つてる鳳さんも怖さを紛らわしてくれる要因だつたが杏には全く効果はなかつたらしい。

足がすくんで動けない杏を引きずりながら次は空中ブランコへ。ジエットコースターのこともありかなりビビっていたがこちらはかなり優しめで全然楽しめた、風を切りながら回るのは爽快でとても気持ちよかつたが終わつた後、真っ直ぐ歩けなくなつてしまつていた。ジエットコースターの時も思つたが俺は三半規管がかなり弱いみたいだ。

「大丈夫ですか先輩？」

「お、おお……冬弥か。気持ち悪くはないんだが単純に目が回つてな、冬弥こそ大丈夫なのか？」

「俺は風に靡く司先輩を見ていたらいつの間にか終わつてました」
「そうかそうか、平常運転で安心だ」

司全肯定マシンと化してしまつた冬弥はもう俺たちの理解が及ばない領域まで行つてしまつたらしい、これにはさすがの瑞希も苦笑いを浮かべていた。

この後も色々と回るのかと思いきや類の提案で夜のパレードを最前列で見るために

場所を確保しておくことになつた。

時間も時間だしちょうどいいかもしない、何より正直疲れた。

鳳さんに『えむつて呼んで!』と言わされたのでえむと呼ぶことにしたり、瑞希が買つてきたポップコーンを類と冬弥と俺で半分くらい食べたり、司や類、えむのハチャメチヤつぶりに対する愚痴を草薙さんから聞いたりしていたらあたりは真っ暗に、どうやら時間になつたらしい。

奥の方から煌びやかな飾りを施された乗り物が軽快な音楽とともにゆつたりと流れてくる、どう見てもペンギンのように見えるマスコットキャラクターのフエニーくんが色違いで多数風船を持ちながら歩いていたり、類が子供たちに歩きながらバルーンアートを披露したり……何やつてんだアイツ。

止めに行つた司も巻き込んでパレードの一部みたいになつてしまつた。あ、えむも走つてつた。

ちらりと草薙さんを見るとため息を一つ着いたあとテクテクと3人の元に歩いていく。

成程、普段からこんな感じなんだろう。まあ結果的に子供たちやその親御さん達からは大盛況のようだしい……ことはないか、現に今警備員さんが走つて行つたし。あ、追いかけられながら全員こつち来了。

「じゃあね真尋くん、是非また僕たちのショーを見に来ておくれよ? フフフ、ではまた学校で会おう!」

「おー、気を付けて逃げろよー」

駆けていく類を追うように司、えむ、ロボットに乗つた草薙さん、警備員さんの順で通り過ぎて行つた。

え、そのロボットどつから出したの? てか操縦上手いな、あの人混みをうまく避けながら速度を維持しつつ逃げている……。

「しかしまあ、まさしく嵐のようだな」

「ほんと、楽しそうだつたね」

「なんだ瑞希、交ざりたいのか?」

「あはは、まっさか……でも、ちょっと羨ましいかな」

なんか悩んでそういうのでじつと瑞希を観察する、『羨望』『安堵』『不安』……相変わらずヘラヘラしてるように見えて色々と抱え込んでるな。

「何がそんなに不安なのか知らんが悩み過ぎるなよ。ただでさえお前は取り繕つて心配かけないようにしてようとするタイプなんだからいつか爆発するぞ。」

「人の心読むのやめてもらつていいかな?……でも、うん、そうだね。悩み過ぎるのは確かにダメかも。よーしーボクたちもパレードが終わつたら帰る?」

どうやら今は大丈夫らしくパレードに集中していた杏と冬弥の方に行つてしまつた。
……偶に息抜きしてやらないとダメそだな。

「あ、だつたらお土産買つて帰ろうよ!」

「お土産…小豆沢にか?」

「うん、あとお父さんに」

「ボクも友達の分買つて帰ろーっと♪」

結局パレードを最後まで見ることはなく途中でお土産屋さんに移動、各々お土産を買つてフェニックスワンドームを後にした。

帰りは駅前までは一緒に歩いたがそこで解散となつた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

マヒロ：『みんな家にちゃんと帰れたか？』

A N：『帰れましたよ～、つて久々に孫が泊まりに来た後のおばあちゃんみたいなこと言うんですね』

m i z u k i ☆：『何その例え（笑）』

マヒロ：『一応聞いただけ』

A N：『さつきお父さんにお土産渡したんですけど私の顔見ながら「今日は随分と可愛かったな」って言われたんですよ～なんか知りません？』

m i z u k i ☆：『杏のこと大好きすぎるだけなんじやない？』

マヒロ：『ソウニチガイナイナー』

A N：『……何送つたんですか？』

マヒロ：『ヒント、コンニヤク』

A N :『月曜日が楽しみですね真尋さん♪』

m i z u k i ☆ :『ヒエ・コレガチ切れのやつだよ先輩』

マヒロ :『ありがとう瑞希、どうやら俺はここまでみたいだ』

t o y a :『すみません、お風呂入つてました』

m i z u k i ☆ :『流れぶつ壊れた（笑）』

マヒロ :『冬弥もお帰り、今日はありがとな』

t o y a :『こちらこそありがとうございました、本当に楽しかつたです』

m i z u k i ☆ :『あ、ボクも誘つてくれてありがとう、すっごく楽しかつたよ！』

マヒロ :『それは良かった、じゃあそろそろ落ちるわ。みんなも今日は疲れたろうから

早く寝るんだぞ』

t o y a :『俺も今日はもう休みます、おやすみなさい』

m i z u k i ☆ :『ボクはもうちよつとしたら寝ようかな♪』

A N :『もうちよつと（3時間）』

m i z u k i ☆ :『さすがにそこまでは起きてないよ』

マヒロ :『早めに寝ろよー、じゃあおやすみ』

A N :『ほんとに覚えてろよ?……です』

m i z u k i ☆ :『爆笑』

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

なんだか怖い文字が見えた気がするが見なかつたことにして寝るとして。今日は本当に疲れた、だいたいジエットコースターのせいだけなどな…。
ベットに身を預けるとすぐさま眠気が襲つてきたのでそのまま抗わず眠りにつくのであつた。

Ragnarok of Students (期末試験最終日)

紙に文字を書く音と時計の秒針、誰かが転がす鉛筆の音が無秩序に響く。

そのどれもが乱雑に聽こえるが妙に耳心地が良い。普段騒がしいはずの空間が嘘のように静まり返り、皆普段の気だるげ一律面倒くさそうな顔でなく十人十色、余裕で暇そうな顔や絶望した顔、少し不安そうな顔や全てを諦め悟りきつたような顔等々……。

しかしその誰もがあの時計の分針が50を指すのを心待ちにしている、中には心の中で数えている人もいるだろう、ちなみに後1分47秒で50になる。

周りをキヨロキヨロと見すぎていても目をつけられそうなので自身の手元にのシャーペンをいじくる、使つた覚えがないのに何故か汚れている付属の小さい消しゴムの黒い部分を指で擦つて綺麗になしながら残り時間の経過を待つ。

いつものように『もしテロリストが現れたら』を想像しながら最後に擦つた時にできた消しカスを容赦なく床に叩き落としたらちよどいいタイミングで終了の合図が来

た。

「そこまで、筆記用具から手を離して。一番後ろから前に送つてきてくれ」

こうして俺たちは『期末試験最終日』という学生にとつての正念場を乗り越えた

テストも午前中に終わり昼飯を外で食べる事にした、司と類を誘つたら2人とも一緒に来てくれるらしい。せつかくなので駅前の新しく出来たラーメン屋に行くことにした

「テストどうだつた?」

「数学がな、裏面がさつぱりだつた」

「司くんは応用問題があまり得意ではないようだね」

確かにそれもあるだろうが大方ショーやることを考えていたら没頭してしまってそこ

まで勉強時間が取れなかつたんだろう。

「ええい！そういう貴様らはどうだつたんだ!!」

「僕はいつも通り問題ないよ」

俺も数学はできるから余裕だつた、英語は死んだけどな。

英語許すまじ、単語は頑張れば覚えられるんだが文法は全く慣れなくて中学からずつと赤点と平均点の間をフワフワしてる。

いつかなにかの弾みで赤点のボーダーラインに突つ込んでいきそうで恐ろしい。

「テストが終わつたのに勉強の話をするのは気が滅入つてしまふな……駅前のラーメンは何系なんだ？」

「なかなか理解つて いるラーメン屋だ」

実を言うとテスト期間にもかかわらず普通に2度ほど食べに行つたが……そこはなかなか深いラーメン屋だつた。

なんて言つてゐるうちに看板が見えてきた

「お、ここじやん」

「早速入つてみるか！…そこの客がいるな」

「どうやら食券を先に買うタイプのようだね、イチオシは背脂マシマシ豚骨。若年層をターゲットにしてるお店かな？」

「こら、そういうことはお店の外で言いなさい」

「何より若者であるオレたちは店の目論見通り食べに來ている訳だしな、ハツハツハツ

ハ!!」

雜談していると三人分の席が空いたらしいので各々食券を持つて店員さんについて行く。

ちなみに類は醤油もやし抜き、司は豚骨麺硬め、俺は醤油豚骨薄め麺硬め小ライス、一瞬店員さんの眉がピクリと動いたが無理もない。恐らく今調理場は緊張が走っているだろう。「理解つてゐる客が來た」と。

しばらくして三人分一氣に來たので揃つて食べる。

「「「いただきます」」

まずスープ、空気を含みながら口の中で少量シェイクするように味わう、鼻から抜け
る空気がまた食欲をそそる。

次に麺を少量すする、ここではあえてスープと絡ませすぎず麺本来の風味を楽しむ。
そして今度は麺を多めにそこから持ち上げ上澄みの背脂たちを巻き込みながら上下
を返す『天地返し』を行い通常量をしつかりスープに絡めて啜る、多少の火傷は覚悟し
て啜るべし。

一旦水を挟み小休止、ここまででラーメンのスープと麺を味わう。

続いてもやしを沈める、じゅくじゅくにスープを染み込ませたもやしは噛めば噛むほど
スープがシミ出てくる最高のサブポディションだ。こいつを噛み締めながら口に白
米をほおりこむ。ホロホロと米がスープと混ざり合いもやしのじゅくじゅくという子
氣味良い歯ごたえと共に口の中が幸福感で満たされる。

分厚めのチャーシューは噛むほど味の深さに感嘆させられる、しかしこの分厚さと脂
身で二枚は無理だろうと思つてしまふが気がつくと食べきつてしまふ。

海苔も沈め海苔ごと麺を掴み啜り上げる、もう一枚はスープに浸した後米に巻き食べ
る、これがまた美味い。

半分ほど食べたらここでニンニクを追加だ、これをするしないで大きく味に変化が出

る。

そしてニンニクとトッピング、スープに麺を二度目の『天地返し』よく混ぜたら……啜る。

スープのみになつたらそこに残りの白米を突っ込みおじやにする。蓮華でほぐしながら半分だけ齧つておいておいた半熟卵の黄身をスープで溶きよく混ぜ口に運ぶ。

そして注意点だがここまでをかなりスピーディに行わなければ最後のおじやがぬるくなってしまうのでできるだけ急ぐこと。

最後の〆に水を飲む。ラーメン後の口直しの水はラーメンの一部と言つても過言ではない、これを怠るのは間抜けがすることだ。

「（ゞ）ちそうさまでした」

「…………いや、なんだ今の!?」

「どうしたんだい司くん？君も早く食べきらないと麺が伸びてしまうよ」

「早くしろ司、ラーメンは待つてくれないぞ」

「オレがおかしいのか!? ラーメン食べる学生とは普通そんな感じなのか!?」

他の人がどうかは知らんが俺はラーメン大好き人間なのでこだわる方だ。

「「「（）ちそうさまでした～」」

「「「ありがとうございましたあツ!!」」

店員さんたちの気合いいっぱいな挨拶を聴きながら帰路に着く。

どうやら司は思いのほか気に入ってくれたみたいでさつきから「美味かつた!! 美味かつた!!」と興奮気味である。

あの後司は替え玉頬んでいた。『学生替え玉一回無料!!』を見つけてすぐに頬んでいた、なんだかんだ三人の中で一番食べてたような気がする。

「今まで食べた中では一番美味しいラーメンだつたかもしれんな！」

「そこまで気に入つて貰えたなら誘つてよかつた」

「僕もかなり美味しかつたと思うよ。特に野菜を抜きにできるのが素晴らしい……と確かに真尋くんはこっち方面だつたかな？」

「む、もうこんなところまで歩いていたのか。ではな真尋、また明日：：は学校は休みだつ

たな

「だな、次会うのはテストの返却日じゃないか?」

「そうだね、じゃあまたね真尋くん」

「ではな!」

「おー」

二人と別れ、夜からの用事に向けての準備を頭の中で考えながら家まで一直線に帰つ
た。

（入相家真尋の部屋）

今日も残すところあと30分程度といった時刻に『ナイトコード』にログインする。
初めてニーゴさんと話してからかれこれ二ヶ月ほど経過しようとしていた。

S o m a :『こんばんは』

K :『こんばんは、ボイチャ来れそうですか?』

S o m a :『ちよつと待つてください』

『Somaさんがボイスチャットに参加しました』

「こんばんは」

「こんばんは、今日も早いね」

「先輩いらっしゃい」

「まだ二人だけ?」

「雪はわかんないけど、えななんは今日学校だつたから遅くなるんじゃないかな?」

「雪は予備校だつて言つてたよーつと、できた!…うん、うん、だいたいこんな感じかな、K、先輩、ちょっとMV見てもらつていい?」

A m i a :『V r o u g h 07. m p 4』

♪少年少女鑑賞中♪

「いいんじゃないかな。今回の曲の雰囲気とマッチしてるとと思う」

「動画に関しては素人だから技術的なことはなんとも言えんが……このサビで盛り上がる瞬間のこの演出、かなり好きだぞ」

「よかつた!。あとは来てない二人にも見てもらつて調整してでボクのは終わりそう」

「Amiaはほぼ完成度見ていいね。Somaの方はどうなつてる?」

「声撮りはできるからあとは意見欲しい感じ。貼るからちよつと待つてな」

S o m a :『L i b r a r y 1 1 . w a v』

「少年少女鑑賞中」

「うん、声撮りも大丈夫。：やつぱり男声は女声とは違うね」

「そりやね、特に先輩は高音あんまり得意じやないでしょ？歌みたも低音アレンジ多めだし」

「ん、確かにあんまり好んでは歌わないけど歌えないことはないぞ？やつぱり低音の方が上手く歌える気がするけどな」

「あとは雪とえなんの意見聞いてからだね」「二人が来るまで何かしとくことある？」

「俺は撮り直すつもりでいるけどそれも一人が来ないとだからな」

「「……」」

「もしかして暇な感じ？」

「多分？わたしも他の作業はかなりキリがいいから今から始めるのも微妙かな。それに二人がもう少しで来るなら待つて意見聞いてから作業に取り掛かった方がいいと思う

し

「なんかするか？」

「ん~…あ、そういえば先輩、試験どうだつた？」

「普通だぞ、良もあつたし不可もあつた。不可つて言つても赤点はとつてないとと思うからな?」

「そういえば雪も定期試験があるつて言つてた気がする」

「試験終わつて直で予備校：ボクにはやつぱり無理だな~」

「A m i aはちゃんと受けたんだろうな?」

「先生に捕まつて一人寂しく別室で受けてたよ」

「どうだつたの?」

「赤はない…と思う」

「英語以外なら教えてやるぞ」

「ええ~、めんどくさ~い」

「いつか痛い目見ろコンチキショ~」

「ふふつ~」

「おつ、先輩聞いた? 今のKの微笑み。これ聞けただけでも今日試験受けてよかつた~つてなるよね」

「Kが神格化され過ぎだろ」

「初めて会った時から思つてたけど二人は本当に仲がいいね」

「適度にツッコミやすいボケを入れてくるからそう見えるんだろうな」

「え、全部本心だよ？」

「だとしたら幾つか話し合わないといけないやつがあるんだが？」

「…やっぱり仲良いね」

《えななんさんがボイスチャットに参加しました》

「おつかれ！」

「おつー、夜間も今日試験あつたの？」

「そう、聞いてよ！最後の二教科が英語と数学だつたの！普通英國數理社は副教科と組ませるもんでしょう！それに今回範囲が広めの英語と数学を同じ日にやるなんて、ほんと信じらんない！」

「おお…えななんの『ほんと信じらんない！』久々に聞いたかも」「恒例になるほど言つてないから！」

《雪さんがボイスチャットに参加しました》

「お待たせしちゃつてごめんなさい」

「お疲れ様、雪。来てもらつて早速で悪いけど A m i a の M V と S o m a の声撮りの
チエックお願ひしていい? えなんもお願ひ」

「おつけー!」

「うん、もちろん」

この後は少し声を撮り直したり K の作業の手伝いをしたりしながら順調に作業を進
めて行つた。

「気が付いたらお互い呼び捨て」位が丁度いい

着々と年の暮れに向かっている今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか。特に用事もない俺は溜まりに溜まつた積みゲーの消化に勤しんでいる。

やはり死にゲーは長期休暇にやり込むに限る。時間が許す限りトライアンドエラーを繰り返すこの快感、雑魚敵が雑魚じゃないという矛盾を抱えたゲーム、もちろん中ボスやボスも容易であるはずもなく、慣れるまではサンドバッグにされ敵の動きを覚えるところから始まる。

そんなこんなで「戦国に忍ぶ」狼を操作している訳だがやはり難しい。3日目で弦ちゃん倒したのは早い方なのか……？

今晚の25時、ニーゴさんのチャンネルで歌動画が上がるらしく、「ちゃんと不備なくアップされているかのチェックを行う」との事だ、ほとんどいつもの作業のと変わらんと踏んでいる。

という訳で、25時までは狼さんを操って忍びの撃を全うしたいと思う。

（24：45）

ようやく「蝶の幻をぶつ飛ばす不思議な豆の力で攻略」したところでいい時間になってしまった。ぶつ通しでやつてまだエンディング1個も見れてないのは俺が下手なのが難しすぎるのか……

とりあえずゲームは一旦置いといてナイトコードにログインする。

少し早いが誰かしらいるだろう、と入つてみるとKと雪さんの二人がいた。
とりあえずボイチャに入るか

《Somaさんがボイスチャットに参加しました》

「こんばんは」

「あ、Somaさん。こんばんは」

「Kは作業してるのか？」

「ついさつき夜食を取りに行くつて」

「夜食か……俺もなんか食べようかな」

「何か取つてくる?」

「いや、さすがに一人で待たせるのはあれだしKが帰つてくるか誰か入つてきたりするよ」

「そつか、ありがとう」

「……」

今思えばA m i aはともかくとしてK以外と2人つきりになる機会があまりなかつたので何を話せばいいかよくわからん。

そもそも俺、雪さんのことあまり知らんから共通の話題もわからん。音楽の話でもするか?でもジャンルによつて色々あるしなあ……

「S o m aさんは音楽以外の趣味つて何かあるの?」

意外なことに雪さんの方から話を振つてくれた。普段の印象だと人の話を聞くに徹する人だと思つていたから驚いた。

しかし趣味か:読書くらいしかないな、最近読んだ本の話でもするか。

「読書だな。最近は歴史物ばかり読んでる」

「なんだ、私も本はそれなりに読むけど趣味って呼べるほどじゃないかな。読むとすればミステリーものが多いし」

「雪さんは趣味とかあるのか?」

「アクリウムかな?」

「へえー、何か飼つてたりするのか?」

「……何も入れてないの。水と少しの水草だけ」

「水草水槽つてやつか? いいじやん、オシャレっぽいし」

「ふふ、そうかもね」

「それに、水つて見てるだけで吸い込まれそうな魅力あるしな」

「……そうだね、自分で透明になっていくみたいな、そんなに不思議な感じがあるよね」

「詩的だな、さすが作詞担当」

「ふふ、ありがとう」

『Ami aさんがボイスチャットに参加しました』

「やつほー、おつかれー」

「おつかれ様、A m i a」

「おつかれ」

「Kは作業中?」

「夜食取りに行ってる」

「なるほど、Kと言えばココ最近は『インスピレーションが……溢れてくる!!』って言いながらいつにも増してバリバリ曲作ってるよね」

「確かに最近は気合が入ってるね」

「俺も色々聞かれたからな、男性視点が欲しいとかコードの相談とか……そのおかげで敬語も抜けたけど」

Kは基本的に通話にいるからさつきも言つた通り二人つきりになる機会がそれなりに多かつた。

と言つても挨拶だけしてお互いミユートのままそれぞれ全く別の作業してることが大半だつた気がする。

……お腹すいてきたかも、なんか取つてくるか

「俺もちよつと食べれる物取つてくれる」「いつてら〜」

……さて、何かあつたかな

「ただいま」

「お、センパイおかえり〜」

「こんばんはS o m a」

「こんばんは、Kも帰つてきてたのか」

「KとS o m aさんは何を持つてきたの？」

「私はカツラーメン……ねぎ塩カルビ味つて書いてある」

「俺もカツラーメン、味はカレーだな」

「……あんまりこの時間に吃るのは良くないかもね」

「いやー、雪さんの言う通りなんだけどこの時間に吃べるのは罪悪感も含めて美味しいんだよな」

《えななんさんがボイスチャットに参加しました》

「ちよつとみんな聞いて!?」

「どうしたのえななん?また弟くんに図星突かれて拗ねちゃった?」

「図星じやないし!!」

『』『』『』『』『』

えななんのマシンガントークをBGMに音が乗らないようにミュートにして麺を啜る、麺の固さは固めが好きなので少し早めに食べ始める。お、久々に食べるとめっちゃ美味い。

Kも食べているようで同じようにミュートにしている、というかねぎ塩カルビってどんな味だよ……気になりすぎる、今度食べてみよう。

そういうしているうちに25時数分前に、メに冷凍ご飯とチーズ入れてリゾットにしたらAmiaとえななんに「それは犯罪ツ!!」と怒られた……美味しかったからまたするけど。

「ん、そろそろ時間だね」

「一番上に……あつた、これだな。うお、クソデカカウントダウン、耳潰れる」「あつはは、音量大きいからちゃんと下げとかない——つお！ミミガーツ!!」

「ミミガーツって聞いたことあるような……」

「豚の耳を使つた沖縄料理の一つだね」

「コリコリしてて美味しいらしいな、食べてみたい」

「始まるよ」

ミミガートークに花を咲かしているといつの間にか曲が始まつた。

その後はなんら問題も無く動画は終了。高評価もすごい勢いで付いている……さすがは天下のニーゴ様やで。

それと同時に俺のお仕事もここで終了、最後に挨拶してグループから退出した。

それから数日後の昼間、年も明けのゴタゴタなんかも終わつて久々にコタツでぬくぬく死にゲーをしていると携帯に年明けぶりの通知が鳴つた。

マヒロ：『暇』
mizuki☆：『ニーゴのみんなで打ち上げ行くんだけどセンパイ今日暇？』

マヒロ：『行つてらっしゃい』

み
い
ず
く
い
☆
い
や
い
や
、
セ
ン
パ
イ
も
行
く
ん
だ
よ
？
こ
の
前
の
曲
の
打
ち
上
げ
な
ん
だ
か

5

マヒロ：『マジか……行けたら行くわ』

マヒロ：『てか打ち上げやるんだな。正直そういうイメージなかつた』

m i z u k i ☆ :『それ来ないやつじゃん!』

m i z u k i ☆ :『打ち上げに行くようになつたのは最近なんだ』

m i z u k i ☆ :『本当に暇そだから勝手に参加にしとくよ』

マヒロ :『何時?』

m i z u k i ☆ :『いつも通りなら16時、変更あつたら連絡するね』

マヒロ :『おk』

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

……待てよ、打ち上げつことはオフだよな? ニーゴの方々とリアルで会う
…………無理かもしない。

普段学校で司や類と一緒にいるせいかコミュ力高いと思われることがよくあるが実際そんなことは無い。事実、学校の友達は生徒より先生の方が多い。

そんな俺がニーゴのK、雪さん、えなんの女性3人とオフで会う……：

「無理だな」

死ぬ、100%死ぬ。

……なんで脳死いいよしちやうかなあ俺、予定が空いてたらだいたいノータイムでいいよつて言つちやう癒治さないと。

とりあえず着替えるか。いい機会だしパジャマ生活ともおさらばしよう。
グツバイお気に入りのクタクタパジャマ。

♪とある大きめの交差点♪

時刻は15時35分。今回はいつしかの反省を生かし余裕を持つて家を出たので、歩きながらファミレスに向かっている。

ふと視界の端に目立つ白髪……銀髪? が目に付いた。というかふらついてる、貧血か

?

「……大丈夫ですか？」

「その声……もしかして S o m a？」

「え、あ、はい。……いや、はいつて言つちゃダメじゃん俺、一応隠してんだから」

「ふふつ、間違いなく S o m a だね。大丈夫、K だよ？」

「K か！通りで聞いた事のある声だと思ったよ。それより大丈夫か？具合悪そうに見え
るが……」

「大丈夫だよ、ちょっと太陽が眩しすぎて目を慣らしてただけ」

「……ちなみに何日ぶりの外出？」

「……………2」

「2日か、だつたら全然健康的なほうだな」

「あ、いや……………2週間ぶり……………です。」

「……………とりあえず日陰から出る」

「も、もうちよつと待つて。そうしたら目が慣れると思うか「3秒前）、2（）、1（）ま、

待つて！急にそんな明るいところに出たら目が潰れちゃうから…………！」

「ゆつくりでいいから、とりあえず出てみろ」

とりあえず日向に出してみるとプルプルと震え出した。なにこれ面白・失礼、可愛いな。

とりあえず目を瞑つてるので今のうちに交差点を通過させる。途中チラツと目を開けては「おうつ?!」とアザラシみたいに鳴いていたが気にせず引つ張つた。

「……死ぬかと思つた」

「死なないって。でもまあ、冬場でこれなら夏は本当に死ぬぞ……」

しかし落ち着いてKの容姿を見ていると、どこかで見たことがあるような、ないような?

……あ、思い出した。CD買いに行つた時にたまたま会つた星乃さんと見つめ合つた子だ。

と言つてもKは俺のこと覚えてないだろうし、リアルで初対面なのは変わりないな。

「あれー、奏にセンパイじやん? なになに、いつの間に仲良くなつたの?」

ちよつと前の記憶を呼び起こしていると、ここ最近では聞きなれた明るい声が耳に届

いた。

「あ、瑞希。わたしもさつき会ったばかりなんだ」

「交差点の近くでフラフラしてゐる人がいたからな、声を掛けたらまたまKだつたんだよ……というか本名奏つて言うんだな」

「フラフラつて……もしかして奏、また太陽が眩しそぎて日陰に逃げてたとか？」

どうやら外に出る度にこれをやつてゐるようだ。

やたらと日陰の位置を完璧に把握していたのも頷ける。

「ちよつと待つてね、えくつと……あつた！奏、はいこれ」

「これつて……折り畳み傘？」

「日傘になるタイプのね！それがあれば少しは自主的に外に出るんじゃないかなうつて思つてね」

ニヤニヤしながらもちろんと思いやりの気持ちが溢れている瑞希からのプレゼント。
それに対して嬉しそうに、でもどこか困つたように微笑みみながら感謝を告げるK：も

とい奏さん。

うん、完全に蚊帳の外だ。でもそれでいい、なんなら壁になつて存在消したい、見守り隊隊長になりたい。

「とりあえず、早くファミレス行こうよ！ほらしゅっぱーっ！」

「あ、ちょっと瑞希……！」

駆け足でファミレスに向かつた瑞希の後ろを、さつそく貰つた日傘を差し、駆け足のつもりだろうがどう見ても周りの人人が歩くペースと同じくらいの速度しか出ていない奏さん。

それを見て、『なんか青春物のワンシーンみたいだな～』なんて思いながら俺もファミレスに向かつた。

「ファミレス、

時刻はだいたい16時。今日の前には奏（呼び捨てでいいって言われた）とえなんと思われる人と雪さんと思われる人が、横には瑞希が座っている状態だ。

ちなみにあの後は、奏（呼び捨てでいいって言われた（大事な事なので2回言いました））の体力的に小休憩を一旦挟んでから普通に3人で歩いた。

「とりあえずなにか頼もうよ、ボクはコーラと山盛りボーテト！」

「わたしはウーロン茶」

「私もそれにしようかな」

「コーヒー、ホットで」

「私は……あ、この季節限定のパフェにしよう。それとホットレモンティー」

「えななん前も季節限定の映えチョイスしてなかつた？」

「いいでしょ別に、みんな決まつたんだから早くボタン押してよ」

「はいはい」

オンでもオフでもこの2人の掛け合いが何ら変化することは無い事に妙な安心感を覚えながら、オフで初対面なえななんと雪さんに目を向ける。

「はじめまして……では無いのか?いや、でもオフで会うのは初めてだし…」

「ああ、なんか安心した。あんた完全にS o m aね、ちょっと緊張してたのがバカラしくなるくらい想像通り」

「改めて初めまして、雪こと朝比奈まふゆです。」

「ご丁寧にどうも、入相真尋です。あとえななんに対してはその言葉そつくりそのままお返しするぞ」

「ちよつと、それどういうことよ……まつたく。あ、東雲絵名。よろしく」

「わたしも改めて。宵崎奏、よろしく」

うん、3人ともオフで会うとイメージにピッタリ当てはまる感じの人達だな。これら危惧していた一言も話さずに「ツスー……自分用事あるの忘れてました。すみません今日はお先に失礼します。」とならずに済みそうだ。

軽い自己紹介の終わるタイミングで注文していたものが届いた。『寒かつたから暖か

いの飲みたい』という単純な思考でろくにメニューも見ずに頼んだコーヒー様だ。

「それじゃあ、今回もお疲れ様の意を込めて！カンパーアイ！」

「いや、ホットコーヒーとホットレモンティーに乾杯を要求するな……つて無理やりぶつけに来るなこぼすだろ！ねえ、やめて？ほんとにこぼれるからやめて!?」

「2人は本当に仲がいいね」

「え、どこが？どう見てもいじめ1歩手前だぞ？ほら見ろ、今だつて虎視眈々とこちらを狙つてる目をしてるぞ！」

「あつはははは!!『めん』『めん、センパイのリアクションつてついいじめ……いじりたくなつちやうんだよね。ほら、ボクのポテト食べていいから許してよ』

「あんた今完全にいじめつて言つたじやない……あ、上手く撮れたかも。早速アップしちゃおつと」

マジでオンでもオフでも何一つ変わんない気がしてきた……むしろ物理的被害が増えている気がする。

仕方ない、またポテトのカリカリのやつだけ全部食べ尽くすか。
あ、そういえば……

「打ち上げって具体的に何するんだ?」

「集まつて話すだけだよ?」

「へー、それはまたなんで?」

「みんなのことをもつとよく知りたかつたから」

「そうか、いい打ち上げだな」

色々あつたんだろうな、瑞希も『打ち上げに行くようになつたのは最近』ってチャットで言つてたし。その上理由が『みんなのことをもつとよく知りたい』なんて色々ありましたのか……今もまだ途中なのかはわからんが複雑なのはよく分かる。

だからこそ首は突つ込まない、深くは踏み入らない。部外者が出しやばつたらろくなことにならないからな。

「ということでSoma・真尋さんについても色々知りたいと思うんだけど……いいかな?」

「真尋でいいよ、多分同じ年だし。そうだな……特に面白い話もないから何をどう話したものか」

「なんでもいいよ、例えば音楽を始めたきっかけとか」

「きっかけは父親だな、音楽関係の人間で家に機材とか防音室とかがあつたから自然とな」

「そんな調子でニーゴメンバーの質問に答えるという形式で何かと色んな質問に答えて言つた。」

中でも母親が精神科の医師だという話題に食い付きが案外良かつた。

「へえ、もしかして先輩の特技って母親譲り?」

「直伝。仲の良い人かかなり気になつた人しかやらぬようにしてるけどな」

多分なんちやつて読心術のことだろう。実際瑞希はかなり気になつた人だ。

「何、その特技つて?」

「目を診たらある程度どんな感情抱いてるか分かるっていうやつ」

「せつかくだからえなんも見てもらつたら?」

「へえ、ちょっと面白そう。ねえ、やつて見せてよ」

「お、いいぞ」

「……」

「……」

「……」

「……ね、ねえ。まだ？」

「…………『好奇心』と『不安』が半端なくて他が見えん」

「見えんって……センパイ！ボクの時はあんなにビシバシ当ててきただじやんか」

「あれは揺さぶりかけた感じだつたし、問い合わせに対しての反応とか本当はどう感じてるかを見抜く、みたいな感じだつたしな。今回とは訳が違う」

正直いきなり目をじっと見られたら『不安』とか『嫌悪』とかでだいたい埋まっちゃうからよくわかんない（。▽。）

とはさすがに言えないのでそれっぽいことを言つといた。

「なんかボクだけハズレ引いたみたいな気分で嫌なんだけど……あ、そうだ！じゃあセンパイが質問してそれに答えるのは？」

「だつたら、多少は分かると思うが」

「よし、決定！じゃあ奏に質問どうぞ!!」

「え、わたし？えなんじやなくていいの？」

「それにいきなり質問って言われても真尋さんも困るんじや……」

「なんで俺を誘つたんですか」

「あんたいきなりド直球ね!? つて、私の番ほんとにあれで終わりなの!?」

おお、やはりえなんにはツッコミの才能があるな。目指せ、全ユニット芸人化計画

(謎電波)

失敬、謎電波受信はこの辺にして。

まふゆさんの心配を裏切るようで悪いが、実は前々から気になつていてることがあつた。

「なぜ俺なのか?」「他にも適任がいたんじゃないのか?」

聞こうかとも思つたがそれではまるで依頼を受けたくないみたいなニュアンスで取られかねないから聞いてこなかつた。

「……きっかけは真尋も知つての通り瑞希の動画だよ。そこから気になつて歌の動画を色々聞いてみたんだけど、真尋の歌は他の人からは感じられないナニカがあつたんだ。

それが凄く貴重で特別なものに思えて。それを知りたいって思ったから真尋にお願いしたの』

『尊敬』『興味』『感謝』……そんなに真つ直ぐな言葉をそんなに真つ直ぐな感情で向けられたら、俺は……俺は……

「センパイ…………何照れてんの顔キモイよ？」

「キモイとか言うなよ!? 大体なんだよ奏! なんでそんなにいい子なの!? 聖人君子かお前は!! 真っ直ぐすぎるだろ!!! 守護るぞッ!!!!」

「うえ?! えつと…、「ごめんなさい?」

「奏、多分これ謝らなくていいと思う」

えなんの言う通りだ、どうか謝らないでくれ。でも瑞希は謝れ。

「ふう、よし。落ち着いたからラスト行くか」

「…………最後はまふゆだね」

「…………」「」

え、何？なんか空気重くなつたんだけど？俺悪いことしてる？やつぱり奏に謝つた方が良かつた??

「真尋さん？何聞いてくれても大丈夫ですよ」

「あ、ああ。じやあ…………『最近楽しかつたことって何かあるか？』」

うわあ、超無難な質問しちやつた。まふゆさんも困つてるじやん、やらかしたかなあこれ。今からでも違うのにしようかなあ……て言うかさつきからほか三人がすつごく静かなんだけど？え、君たちなんでそんなに真剣なの？何？ガチで聞いちやダメなやつだつたの！？

「あ、あう……答えずらいなら別の「強いて言うなら学校の友達に勉強を教えてたことかな？」

あ、 良 かつ た。 ちや ん と 答 え て く r

「……………ちょっと御手洗に」「あ、うん。行つてらっしゃい」

……なんだアレ

so other sides

「……やつぱり嘘つてバレたかな」

「まあ、『何かヤバいもの見つけた』って顔してたわね」

「でも良かつたのまふゆ？ 真尋に気付かれるかもしねいよ」

「……ん、センパイから？」

『ちよつと来て貰えるか？ 話がしたい』
『おつけー』

「ごめん、ボクもトイレ！」

「あ…行つちやつた」

「まあ、バレても特に何かが変わるつて訳でもないし。私はどっちでもいいかな？」

「あんたね…こつちの気苦労も知らないで」

「…? なんで絵名が苦労するの??」

「…本ツ当にそういうところは今でも嫌い」

「あつはは…」

↗ 真尋 side ↘

「センパイ、大丈夫？」

「…アレはなんだ？」

「あ…、因みに何考えてるかわかったの？」

「何にも診えなかつた」

「それつてそんなに慌てる事なの？ 何も考えてないだけなんじや」

「だとしたらまふゆさんは廃人か悟り開いてるかの二択だ。とりあえず色々教えてくれ、というかお前知つてて診せたな?」

「うん、センパイなら何かわかるかなって。これでも信用してるんだよ?」

「いつか信頼して貰えるように頑張るよ」

「…………で、まふゆのことなんだけど」

その後瑞希から所々を搔い摘んだ説明を聞いたが……下手すれば瑞希よりも複雑な状態だ。

みんなして沈黙するのも領ける。

「……とりあえず戻るか」

「おかれり二人とも」

「たつだいまー」

「ただいま」

うつわあ、氣まずい。特にまふゆさんがもう感情無くなつてるうううう。隠す氣ZE
R Oじやんか……

しゃーない、こつちも腹を括るか。

「あー、ゴホン。まふゆさん？」

「……なに？」

「霧囲氣的にある程度予想は着いてそุดだから单刀直入に。通院しろ」

「……どうして？」

「はつきりいつてそれは完全に心の病だ、それも重度のな。……それと、一応確認だが感
覚器官に異常があるとかはないか？鼻が利かないとか耳が聴こえない……はないか」

「……味がわからない」

「味覚障害か、となると嗅覚にも何かしら……そこら辺は耳鼻咽喉科だからよくわかん
ないけど原因は間違ひ無くストレスだよな。

因みに味覚が感じなくなつた時期とかつてわかつたりするか？あとストレスの原因

として思い当たる事とか。他には……」

「……ねえ」

「なんだ？」

「なんでいきなりカウンセリング始めるの？」

「ぶふつ！」

「ちよ、瑞希汚い」

「ゞ、ゞめん。まふゆがボクと全く同じこと言つたからつい」

空気読んで黙つていってくれた三人が話し出した。正直黙つてから怒つてると思つてめっちゃ怖かつた。

「同じ」と……瑞希もこれされたの？」

「うん、それもセンパイに初めて会った日にね」

「真尋、初対面でそれはどうかと思うよ？」

「うわ、奏に言われるとすんごい刺さる」

「て言うか真尋、もしかして会う人みんなにこんなこと……え、もしかしてあたしにも？」

「あ、えなんには何もしないぞ」「なんかムカつくッ!!」

シリアスがどこかに行つてしまつたが正直俺としてはありがたい。正直シリアスてまふゆと話してると怖くて泣きそうに……ぐすん

「まあ、通院しろなんて言つたがしてないつてことは相応の理由があるんだろう？ 例えば……親が認めそうにないとか」

「……認めないだろうね、『私たちの子が精神的に参つてるなんてありえない』なんて言いそう」

当たつちゃつたよ。てか気のせいかちよつと笑つてる？『絶望の底から、こにちは。ダークネスマイル・まふゆ』しちやつてる？

「…………まあ、ニーゴのメンバーの前ではその感じなんだろ？ だつたら思つたこととかを感じたことを全部口に出してみてくれ。さつきの『なんでいきなりカウンセリング始めてるの？』なんか百点だ。

思ったことを口に出す、誰かに聞いてもらうつてことできる環境があるんだし利用しどけ。

あとこれはまふゆ以外になんだが『なんで分からんの!?』とか『いい加減にしろ!!』みたいなことは言わないようしてくれ。本人が一番それについて悩んでるんだ。勉強してる時に勉強しろって言われるようなもんだムカつくだろ?

というわけで、まあなんの責任も負えないけどいつか治るといいな

「「おお～」」 パチパチパチパチ

なんか拍手貰つて照れくさくなつちやつたが実際大事な事だと思つてる。アウト プットすることで自分が何を考えているのかを自覚できる……みたいな事だと思う。多分、恐らく、きっと、maybe……

「……真尋」

「お、なんだ?」

「なんでそこまで気を使つてくれるの?」

「んく……気になつたから?」

「……それだけ?」

「それだけ」

「…………そう」

なんかわからんがまふゆも今の質問で納得してくれたらしい。ウーロン茶をちびち
び飲み始めた。

その後は特に何かがあつたとか言うわけでもなく、おすすめのアーティストの話やシ
ンプルに好きな食べ物や飲み物、動物と言った先程のシリアルスはどこに行つたんだと言
わんばかりの他愛もない話で盛り上がつたが、冬場特有の早めの日没似合させて解散と
なつた。

気が付いたらまふゆのこと呼び捨てになつてたな……なんか恥ずかしい

やっぱりどこか似てるもの

寒さが肌に突き刺さるような冬空の下、皆様いかがお過ごしでしょうか。

てかまじ寒い、12月でこれとか1月、2月とか人類生きていけねえだろ。

などと心の中ボヤきながら雪も降らないくせに昼間つからどんどんよりとした空を眺めながら歩く。

何故こんな寒空の下を歩いているかと言うと、珍しく謙さんからメッセージが届いていたからだ。

『昼から忙しくなりそุดだから手伝いに来て欲しい』

…いや、俺はバイトか？

詳細を聞くために電話をかけたところ、杏発案のクリスマス限定スイーツがSNSでそこそこバズつたらしく人手が必要になつたんだとか、もちろん働いた分だけ賃金は出してくれるみたいだ。

まあ、たまたま偶然にも12月25日に予定が空いていたのでリア充を棒で叩く仕事はせずに知人の役に立とうと思つた所存だ。

寒さに震えながら暖房の効いた店を目指し、少し早足で向かつた。

すっかりクリスマスムードなビビッドストリートを通りWEEKEND GARA GEに到着した。

準備中の看板がある時に入るのは初めてだな…ちょっと緊張する。

「お邪魔しまーす」

「あ、真尋さん！来てくれてありがとうございます！早速で悪いんですけどこのエプロン付けて厨房の方行つてください、コートとマフラーは私がハンガーにかけとくんで」「お、おう……ほんとに忙しそうだな」

「ほんとに忙しいです…今こはね達もこっちに向かつてくれてます」

なんか思つてた3倍忙しそうでビックリしたけどとりあえず言われた通りエプロン付けて厨房に向かう。

謙さんがいたんで挨拶した後に何したらいいか聞きながら手を洗う。

「とりあえず、お前がどのくらいできるかわからんからこのレシピ通りに一皿作つてくれ」

「え、めっちゃ緊張するんですけど?でも、多分できると思います。一応家事は中一からやつてるんで」

「そういえばお前の両親は共働きだつたな」

「はい、でもまあ定期的に帰つてきてくれますし母さんに関してはこの歳になつてもハグしてきますし……まあ、愛されないより全然いいですよ」

駄ベリながら薄力粉とか砂糖とかを計量したり、卵の黄身と白身を分けたりと手は動かす。

卵白は冷蔵庫で冷やしとく。卵黄に予め振るつておいた薄力粉とベイキングパウダーを加えよく混ぜる。

ある程度冷えた卵白に砂糖を何回かに分けて加えながらハンドミキサーを使つてメレンゲを作る。

メレンゲの3分の1くらいを黄身とかの方によく混せてから残りのメレンゲも混ぜ

すぎない程度に合わせる。

ちよつとオシャレなお店つて感じのするテーブルと一体型のホットプレートに丸い型を置き、そこに生地を垂らして焼いていく。

いい感じに焼き色が着いたら返してちようどパンケーキ1枚分位の蓋で蒸し焼き状態にする。

あとはなんか適当にパパパーつてやつて完成

「できましたー」

「どれどれ：もうちよつと焼いた方が俺は好きだな」

「それはレシピ作つた杏に言つてください、俺は時間通り焼いてますからね」

「冗談だ、よくできると思うぞ。ただ盛り付けは杏に任せた方が良さそうだな」

うつ…まあ、多少不格好ではあるか…そういうセンスはないからなあ。

謙さんのテストを受けていると店のドアが開く音がした。

目を向けると他のビビバスメンバーが到着したようだつた。

「おはようござります、手伝いに来ました：つて、なんでセンパイがいるんすか」

「おはようござります真尋先輩、先輩もお店の手伝いで来たんですか？」

「こつはねー！おはようツ!!」

「わっ！あ、杏ちゃん…！急に抱きついたら危ないよ？」

「おはよ、冬弥の言う通り手伝いできたんだ。今日は一緒に頑張ろうな。

…あと、女の子一人のハグを無言で撮つてんじゃねーよ変態親父」

「馬鹿野郎、娘の成長を記録するのは父親の義務だ…彰人、冬弥、それからこはね、今日はよろしく頼むな」

「「はい！」」

その後ホールはこはねと冬弥、キッチンは俺と彰人、杏はフリーで動くことに決ました。

というか彰人の盛り付けがめっちゃ綺麗、本当に同じ食材使ったか？ってくらい俺が盛り付けたやつと違うんだけど…まあ、焼くのは俺の方が上手かつたけどな！！

「少年少女労働中」

虚無顔でパンケーキを焼くマシーンと化していたところ、謙さんに「一旦休憩して来い、ついでにパンケーキ3皿6番テーブルに頼む」と言われた。パンケーキを焼くのを杏と交代してパンケーキ3皿をトレーに乗せて厨房からホルに出る。席はほぼ満席と言った感じで同じ年くらいの女性客がパンケーキを撮りまくっていた。

6番テーブルに向かうと、見覚えのあるピンクのサイドテーブルと茶髪のボブが目に入つた。

向こうもこちらに気づいたようで手をヒラヒラと振ってくれる。

「先輩やつほく、パンケーキ焼いてたの先輩なんだって？杏から聞いたよ」

「あんたにこんな特技あつたとは思わなかつたわ、ちょっと意外かも」

「なんでいるんだ…って杏と仲良かつたもんな。って、パンケーキ3皿つて聞いてるけどもう1人誰かいるのか？」

「え？僕達1皿ずつだよ??」

杏のミスか？1皿は厨房に持つて戻るか：

「謙さんが休憩ついでに食べておけ、と言つてましたよ。お待たせしました、カフェラテが2つとオリジナルブランド1つでございます」

「冬弥くんじやん！もしかして弟くんもいるの？」

「え？ 彰人の奴もいるの？」

「はい、と言つても厨房担当ですが…呼んできましょか？」

「絶対いや」

「あ、話をさえぎつて悪いけど…座つていい？さすがに立ちっぱなしは他のお客さんの邪魔になる」

「どうぞ！」

2人の前と自分座る所にパンケーキを置いて席に着く、そこに冬弥がそれぞれの飲み物を置いてくれた。「ちなみに料金は？」と聞くと「両方とも謙さんの奢りだそうです」と言うと仕事の方に戻つて行つた。

やつと一息ついてコーヒーを啜る、やっぱりあの人気が淹れるコーヒーは美味しい。

えななんはすつごい真剣に写真を撮つてるし瑞希は一生力フェラテをフーフーして冷ましてる。

「そういえば何となく気付いてはいたけど、えななんと彰人つて姉弟なんだな」「そりだけど……言つてなかつたつけ？」

まあ、『東雲』つて苗字あんまり多くはないもんね」「というかセンパイ、外でもえななん呼びなんだね」

「えななんつて言いやすいんだよ」

今更『絵名』つて呼ぶのが恥ずかしいとかそういうのでは無い、ちょっと意識しちやうとかそんなんじやないもん。

「でも実際弟くんと絵名つて中身はともかく外見はあんまり似てないよね、髪色も全然違うし」

「確かに初対面で姉弟だつて気づかれることはあんまりないかも……つと、よし！ 可愛く撮れた♪」

写真撮影も終わつたようで、なんとなく撮り終わるのを待つていた俺と瑞希も撮影終了と共にパンケーキに口を付ける。

そういえば自分で焼いておいて一口も食べてなかつたな…まあ、謙さんも美味いって

言つてたし大丈夫だろ。

「ん、ちゃんと美味いな。ちょっと安心した」

「んくくく!! おいしい!! 生地がふわふわ……これほんとに先輩が作つたの?」

「ほんとだ美味しい、生クリームも変に甘すぎないからいちごのソースの酸味とよく合うし……やるじやない真尋」

そう言いながら美味しそうに食べ進める2人。そこまで褒めて貰えると素直に嬉しいもので少し照れくさを感じながらも残りのパンケーキも味わうこととした。

美味しそうに食べる2人……特にえななんを見ていて気がついた、スイーツを幸せそうに味わうその姿。それが……：

「彰人そつくりだな……」

「……何よいきなり、さつきは似てないって言つてたじやない」

「いや、美味しそうに食べる姿が以外にもそつくりだつたからさ。やっぱり姉弟なんだな」

「あく、確かに絵名も弟くんも食の好みとかは似てるもんね」

えななんは少し顔を顰めながらも思い当たる節があるのか、「もう…」と唸りながらパンケーキをパクつく。

「どうか、彰人と似てるって言われるのがそんなに嫌かね…仲悪いのか？」
いや、多分素直じやないだけだな、そこら辺も彰人と似てるのか。

なんて考えながら食べていると残り一口分に、瑞希とえななんも半分以上は食べ終えているみたいだ。

最後の一口を味わい嚥下し、手を合わす。

「ん、ご馳走様でした」

「はや！先輩お腹すいてたの？」

「そこここ、昼過ぎからずっと厨房立つてたから……丁度間食に良かつたかもな」

「昼過ぎからつて、あんたクリスマスに予定とかなかつたわけ？」

「ぐふうつ!!」

「あ、先輩がダウンした」

な、なかなかいいパンチを放つじやないか……俺じやなかつたら死んでたぞ。

あと瑞希、人をフォークでツンツンするのはやめなさい、危ないでしょ。

「お、お前らこそ何か用事は無いのか？」

「ニーゴのみんなとパーティーの予定だよ！」

「なんかごめんね」

「謝るな泣くぞ？」

「あつはは、ごめんつて先輩」

全く：まあ仲が良さそうでなによりだ、ニーゴは色々と抱えてるもののが大きそ.udか
ら楽しそうだと安心する。

どんな事をするのか聞くと瑞希が楽しそうに話してくれる。

「……あんたも来る？」

「え」

まさかのお誘いだ、それもえななんから。

やっぱり姉なだけあつて気を遣つてくれたのかもしねない。

しかし、どうするか：誘い 자체は嬉しいけど、雰囲気を壊してしまうのでは？という心配もある。

「え、真尋さん店の打ち上げ参加しないんですか！？」

少し考えていると後ろから杏の驚く声が、というか打ち上げ？ そんなの聞いてないけど……

「先輩予定は無いんじゃなかつたの？」

「……もしかして父さんから聞いてない感じですか？」

「なんにも聞いてないけど…打ち上げあるの？」

杏は「はあ」つとため息を吐くと、カウンターでドリンク作製に勤しむ謙さんを一瞥…といふかほほ睨んでる。

どうやら今日は18時に閉店してから打ち上げをやるらしい。

ビビバスメンバーには杏が連絡したので知ってるらしいが、俺だけ謙さんからの連絡だつたので知らなかつた……ということらしい。

「へえ、良かつたじゃない。予定ができたわね」

「知らなかつたけどな。というか、誘つてくれたのに悪いな」

「いいわよ別に、元々ニーゴだけでやるつもりだつたし」

「そういうば絵名、もし先輩がOKしたらどうするつもりだつたの？」

「……？ どうするつてなによ？」

「え、だつて…ああ、えつと……耳貸して」「セカイでやるんでしょ？先輩は連れて行けないんじや…」「あつ、」

瑞希がえななんになにやら小声で話しているが……どうやらこの感じだとOK出さなくて正解だつたみたいだな。

えななんも「あつ」といつた感じでなにか大事なことを忘れてたつて表情だ。

「確かにそだつた…すっかり忘れてた。断つてくれてありがとね、真尋」

「よくわからんが結果オーライつてやつだな、こつちはこつちで楽しむからそつちも楽しんでな」

互いになんとなく申し訳ない気持ちになり、なんとも言えない空気が流れたが、話題を切り替えるように瑞希から質問が飛ぶ。

「先輩と杏達つていつから知り合いなの？文化祭の時はもう仲良さげだつたよね」

「真尋さんはこの店の常連なんだ。初めてきたのが：昨年の一月ぐらいでしたつけ？」

「ああ、高校受験帰りにご褒美のラーメンを食べに行こうと思つてたらコーヒーの匂いにつられてな」

「へえ～、じゃあ真尋はそれからずっと通つてるの？」

「一時期は忙しかつたみたいで来てなかつた時期はありましたけど、最近はまた通つてくれてます」

なんやかんや話が盛り上がつていると奥から謙さん向かつてきているのが見えた。

「盛り上がつているところ悪いが真尋、そろそろ厨房に戻つてくれ……それと杏、伝えてくれつて言つただろ、なんでお前まで一緒になつて話に参加してるんだ」

謙さんに言われて杏は「あ、ヤバ」という顔になる。どうやら大事なことを伝え忘れ

がちなのは謙さんの血らしい。

「やっぱり家族つて似るんだな」とニヤニヤしながらえななんを見ながら言うと「うるさいっ！」とそっぽを向かれた……瑞希が爆笑してたので良しとしよう。

その後は瑞希とえなんも店を後にして、俺も厨房に戻った。
戻ると彰人が少しソワソワしながら待っていた。

「あく、センパイ。姉貴、パンケーキ見てなんか言つてました？」

「ん？ 美味かつたつてさ……ああ、あと盛り付けも綺麗だつて言つてたぞ」
「……そつすか」

「そんなに気になつてたなら顔見せたら良かつたじやないか」

「絶対いやだな」

少しうんざりした顔で即答する彰人を見ながら「ほんと、そつくりだなこの姉弟」と
心の中で呟きつつまた、パンケーキを焼きはじめた。

（数時間後）

「お疲れさん、今日は助かつた。改めて礼を言わせてくれ、ありがとう」「私からもみんな手伝ってくれてありがと！本当に助かつたよ」

普段より早めに『CLOSE』の看板を出したWEEKEND GARAGE。一体いつ作つたのか豪勢な料理と人數分のケーキがテーブルに並んでいる。

そんなご馳走を前に謙さんと杏が俺とビビバスメンバーにお礼を言う。正直こんなに豪華な料理を出して貰えるなら頑張った甲斐が有るつてものだ。

「じゃあ、父さん特製の料理が冷める前に乾杯しようか！みんなグラスは持つた？いくよ？せーのっ……」

「…………メリーカリスマス！」

その後は彰人がシーフードカレーの中に入っているニンジンを避けていたり、杏がサラダに入っているトマトを避けていたりしていた。

「なんでシーフードカレーにニンジンが入っているのか」「なんでわざわざサラダにトマトを入れるのか」その二つの質問に対しても「彩のためだ」としか言わない謙さんだつたりと、とても愉悦・愉快……楽しいクリスマスになつた！

ちなみにだが、彰人と杏は顔を隠しながらもちゃんと完食していた。